ISSN 1883-9924

甲南英文学

No.31 2016

甲南英文学会

ISSN 1883-9924

甲南英文学

甲南英文学会

編集委員
(五十音順、＊印は編集委員長)
青山義孝　中島俊郎　福島彰利　＊秋元孝文

目　次

—— 研究論文 ——

人種と言語のハイブリッド性
—— Rodriguez, Anzaldua, Urrea・・・・・　大森　義彦　1
A Survive-minimalist Approach to the Japanese Right Periphery: The Case of Modals・・・・・・・・・・・・・・・・・　Minoru Fukuda　47
名詞句からの外置とラベルシステム・・・・・・・・・　古川　武史　77
On the Metaphorical Use of Tense Systems in English・・　Kazukuni Sado　97

人種と言語のハイブリッド性
—— Rodriguez, Anzaldua, Urrea

大森義彦

I

Hector A. Torres は、Richard Rodriguez(1944-)へのインタビュー記事の「前書き」のなかで、"The Richard Rodriguez controversy" (276) という表現を使っている。そのことからもわかるとおり、1982 年に最初のエッセイ集 *The Hunger of Memory* が出版されてからの 30 年余り、Rodriguez の文章と発言は常に毀誉褒貶の対象となってきた。Rodriguez 自ら三部作の完結編と呼んだ 2002 年出版の第三エッセイ集 *Brown: The Last Discovery of America* には、1980 年代の著作や発言に見られたものとは異なる姿勢を読みとることができるのだが、"controversy" は依然として続いているようである。

ただ、*Brown* 出版以降の 10 年余りの批評の動向を見ると、肯定的な評価の割合が高くなっているように思われる。Jose F. Aranda Jr. は、今でも相当数のチカーノ批評家・活動家が Rodriguez を保守右派とみなしていることに異を唱え、"He [Rodriguez] is neither a cultural nationalist of Aztlan, nor, I argue, a cultural nationalist of Anglo America" として、"Surely there is a lesson to be learned from Rodriguez's brand of hybridization" (26) と述べている。同様に Jeehyun Lim も、"*Brown* offers

a postmodern understanding of hybridity" (534) と高く評価している。内容だけではなく、Rodriguez の文体に目を留めて高い評価を与えている批評家・研究者たちもいる。否定派の Rafael Perez-Torres は、*Brown* の序文で断片的に文が並べられている点を捉えて、そのことが"the fragmented nature of his thinking" (20) を示していて論理に一貫性がないと結論づけている。確かに、*Brown* 全体が断章の積み重ねから成る随想という印象は残る。しかし、たとえば Michael Nieto Garcia は、Rodriguez をモンテーニュの系譜に連なるエッセイストと捉え、彼の文章は散文詩の域に近づいているとして、"greatly nuanced by irony and ambiguity" (149)と、高く評価している。さらに Garcia は、"The lack of closure, the unwillingness to make an unequivocal pronouncement, is characteristic of Rodriguez's distinctively nuanced style: polyvalent, figurative, always elusive" (155)とも述べている。Perez-Torres によって"fragmented" と一蹴されたものが、多義性、比喩性、曖昧性を特徴とする陰影に富む文体として称揚されているわけだ。似たような観点から肯定的な評価をしているのが Frederick Luis Aldama で、*Brown* の魅力を語って、"the dominance of the aesthetic function (or 'will to style')" "his [Rodriguez's] crafting of image through fresh and exciting new phraseology" "the sublimity of the act of literary creation" (45-46)というような表現を用いている。 文学性の度合の高さが評価の対象となっているのだ。

しかし一方で、＜Rodriguez アレルギー＞とでも呼ぶほかないであろうか、まさにその文学性あるいは芸術性の度合の高さゆえ *Brown* を

否定する批評家、研究者もいる。あとでも触れる Christin Beltran がその一人で、Rodriguez は“a cultural critic with an argument”というより“an artist with an aesthetic”(59)にすぎないと否定的な言い方をし、彼の文体の特徴を“mischievous, poignant, paradoxical, ironic, and facetious”(ibid.)と表現する。五つ並んだ形容詞は、一般には否定的意味合いで使われる“mischievous”と“facetious”(「おどけた、戯れの」)も含めて、皮肉の効いたユーモアを特徴とする Rodriguez の文章を説明する語としては適切である。しかし“paradoxical” “ironic” でさえも否定的に使う Beltran にとっては“an artist with an aesthetic”であること自体が非難の対象となっている。だから彼女は、やはり否定的に、“Rodriguez's aestheticization of political life” (ibid.) とも言う。“aetheticization”とは「芸術化」あるいは「文学化」ということであろうか。政治的ことがらに文学的表現を与えることは、Beltran にとって受け入れがたいことのようだ。序文で Rodriguez 自身が、読者は多くの“leaves of paradox” (xi) に触れることになると予告している。「草の葉」ならぬ「逆説の葉」。そして行を変えて、“You may not want paradox in a book. In which case, you had better seek a pure author”(xii) と言う。まるで Beltran に対する回答のようである。いずれにせよ、“The Richard Rodriguez controversy”が終局を迎えるのはまだ先のことになりそうだ。

上に名前を挙げた Aranda Jr. と Lim のコメントからもわかるとおり、*Brown* の主なテーマはアメリカにおけるハイブリッド性 / ハイブリッド化であった。メキシコ系の作家・著述家のなかにはそれをテ

ーマとする者たちが少なくないのだが、本稿では、Gloria Anzaldua (1942-2004)の *Borderlands/La Frontera: The New Mestiza*(1987)と Luis Alberto Urrea(1955-)の *Nobody's Son : Notes from an American Life* (1998)を取り上げ、それぞれを *Brown* と比較検討してみたい。それら二作品をいわば参照軸としつつ共通点と相違点に目を向けて再考することで、*Brown* に新たな光が当てられ、そこで展開されるハイブリッド性のテーマの特徴が際立つと思うからである。

II

Brown を肯定的に評価している者たちの一人に、スペイン人のアメリカ研究者 Isabel Duran がいる。"[T]he use of the 'brown' metaphor in Rodriguez's text has so many points in common with Anzaldua's *mestiza* metaphor" (127)と述べる Duran は、*Brown* と Anzaldua の *Borderlands /La Frontera*（以下、*Borderlands* と略記）を比較し、類似点・共通点を指摘しつつ両者を高く評価している。Anzaldua も Rodriguez と同じように "a composite self which is a synthesis of many splitting identities" (72)を受け入れる姿勢を示している、というのだ。確かに、"mestiza" はスペイン語で混血を意味するメスティーソ(mestizo)の女性形であり、"brown" は異種混交を示す言葉として用いられているのだから、それぞれが「複合的自我(a composite self)」、つまりはハイブリッド性を表わすメタファーであることは間違いない。すでに名前を挙げた Garcia も、"Rodriguez's conceptualization of brown clearly resonates with Anzaldua's theorization of mestizaje" (158)と、Duran に近い見解を示し

ている。「響き合う(resonates)」ものがあることは否定できない。“I write of blood that is blended” (*Brown* xi) などの表現は、“We are a blending that proves that all blood is intricately woven together” (*Borderlands* 85) と「響き合う」し、“The future is brown, is my thesis” (*Brown* 35)という表現も、“[T]he future will belong to the mestiza”(*Borderlands* 80) とよく似ている。

また、Duran と Garcia は、Rodriguez による(人種的・民族的)本質主義批判を肯定的に指摘する点でも一致している。Duran は、*Brown* およびその出版前後の講演やインタビューで Rodriguez が説いてきたのは“the illusion of ethnic purity and authenticity” (131)であると言い、続けて“One of the main intentions of the use of the brown skin color as a metaphor is. . . to undermine race and to go against obsessive ethnic essentialisms”(ibid.)と述べる。 Garcia も、Rodriguez の発言に“an example of resistance to those narratives of ethnic identity that have transmuted into hegemonic discourses of ethnic authenticity”(151)を見てとり、“Rodriguez resists the essentialization of race” (154)と述べている。この、本質主義と容易に結びつく「民族的真正性(“ethnic authenticity”)」へのこだわりという観点から見た場合、Anzaldua はどういう立場にいるのであろうか。Rodriguez 同様に批判的であろうか。答えは否に近い。拙著ですでに指摘したことではあるが、Rodriguez の“brown”は、メキシコ系あるいはいわゆるヒスパニックに限らず、アメリカ人全体を包含するものとして使われているメタファーである(大森 123)。それに対して、Anzaldua の “mestiza”は、書名からも察せられるように、あくまでもメキシコ系に、特に国境地帯のチカーノに限定して使

われているメタファーである。メタファーとしての“mestiza”を説明する際に彼女が好んで使う表現のなかに、それこそ比喩的な“cross-pollinization”（「異花受粉」）があり、それはたとえば、“From this racial, ideological, cultural and biological cross-pollinization, an ‘alien’ consciousness is presently in the making—a new mestiza consciousness. . . . It’s a consciousness of the Borderlands” (77)というような形で使われる。“a new mestiza consciousness”とは、国境地帯にメキシコ系として住むハイブリッドな人々であればこそ獲得できる「意識（“consciousness”)」なのだ。ここで “alien”という言葉を使っていることからも、それはアメリカ社会のなかでは＜異物＞であるという感覚を伴う「意識」であることがわかる。Anzaldua は、この“alien”という単語を積極的な意味合いを持たせて使っている。メキシコ系は“a distinct people” (63)であると彼女は強調するが、“alien”はそのときの“distinct”と重なり合う単語として使われているのである。さらに、“ [A]s a racial entity, we need to voice our needs. We need to say to white society: We need you to accept the fact that Chicanos are different”(85)とも語っていて、「人種的統一体(“a racial entity”)」としてのメキシコ系の「差異」を認知せよ、と白人アングロ社会に迫っている。“distinct” “a racial entity” “different” などの表現の使用が示しているのは、Anzaldua が“ethnic authenticity” に対して深いこだわりを持っているということであり、それゆえに本質主義的傾向を否定できない作家だったということである。彼女は、メキシコ系あるいはチカーノが忘れてはならないこととして“our predominant Indian genes” (62)を挙げ、“We are 70-80% Indian” (ibid.)と

も言っている。“mestiza” “cross-pollinization”という異種混交を表わすメタファーを使いながらも、混交が起こる前の＜インディアン性＞によって自己のエスニック・アイデンティティを確認しようとしているのだ。第一作 *Hunger of Memory* のなかで “Aztec ruins hold no special interest for me” (5)と言い、第二作 *Days of Obligation*(1992)で “Chicanos determined to portray themselves as Indians in America, as indigenous people, thus casting the United States in the role of Spain”(66)と、チカーノ活動家・批評家へ批判的な視線を向け揶揄していた Rodriguez との隔たりは大きい。メキシコ系を「先住民(“indigenous people”)」と位置づけ、U.S.A.をかつてのスペインに見立ててその抑圧者とする捉え方に、Rodriguez は与しない。 *Brown* のなかにも、“I am the same distance from the conquistador as from the Indian”(228)とある。メキシコ系アメリカ人としての現在の自分は、インディアン、「(スペインの) 征服者」双方と等距離の関係にあり、どちらか一方を重視したりはしない、という姿勢が表れている。すでに述べたとおり、Duran は“the illusion of ethnic purity and authenticity” を指摘しているとして Rodriguez を高く評価しているのだが、だとすれば、Anzaldua はまさにその「幻想(“illusion”)」の中にいた可能性が高い。

Anzaldua のそのような傾向を突いて批判しているのがエルパソ在住のメキシコ系作家・詩人の Benjamin Saenz である。政治的スタンスの点では “We are on the same side—she [Anzaldua] is an ally” と前置きしたうえで、“[S]he fetishizes Aztec and Indian culture” (84-85)と述べて否定的な評価を下している。曾祖母がインディアンだったとして、

自分にも「インディアンの遺伝子(“Indian genes”)」があることを認める Saenz は、しかしながら、“I occupy a different position from indigenous peoples and I cannot borrow their identities” (85)と述べる。さらに、*Boderlands* を締めくくる詩のなかの “*La diosa* lifts us”(199)という一行に触れて、あまりにもノスタルジアに染められているという趣旨の批判が続く。“*La diosa*” はもちろん「女神」のことで、具体的にはアステカ神話に登場する Coatlicue と思われるのだが、そのように先住民神話への回帰によってアイデンティティ確認を果たそうとする姿勢について、“This is no solution. This is an escape, not a confrontation. To return to the ‘traditional’ spiritualities that were in place before the arrival of Cortes and company makes very little sense” (86-87)と手厳しい。そして、Saenz は Anzaldua 批判の終わりの部分に “No one is born with an ‘essential’ identity”(95)と、essential という単語を強調した否定文を置く。このことは、「コルテスとその一団(“Cortes and company”)」、つまりはスペイン人征服者たちが到着する以前の「伝統」への回帰を志向する Anzaldua に、Saenz が本質主義への傾きを見てとったことを示しているであろう。

加えて言えば、Anzaldua がメキシコ系の多くの人々に守護聖人として崇められているグァダルーペの聖母（La Virgen de Guadalupe）に触れるときも、強調されるのはインディアン性である。自身の一族も含めてほとんどのチカーノたちの信仰の対象となっていたのは真正のローマ・カトリックではなく、アステカ文化すなわち異教的要素を内に持つ民間宗教としての “a folk Catholicism” だったとして、“*La*

Virgen de Guadalupe's Indian name is *Coatlalopeuh.* She is the central deity connecting us to our Indian ancestry" (27)と述べる。このあと、Coatlalopeuh / La Virgen de Guadalupe は先ほど挙げた Coatlicue の系譜に連なると指摘したうえで、アステカ神話の女神たちを解説する。解説の対象がほとんど女神であるのは、Anzaldua がフェミニストでしかもレズビアンであるという事実と無縁ではない。いずれにせよ、解説はグゥアダルーペの聖母へと戻って行く。

> Today, *La Virgen de Guadalupe* is the single most potent religious, political and cultural image of the Chicano/*mexicano*. She, like my race, is a synthesis of the old world and the new, of the religion and culture of the two races in our psyche, the conquerors and the conquered. She is the symbol of the *mestizo* true to his or her Indian values. (30)

続けて、"*La Virgen de Guadalupe* is the symbol of ethnic identity and of the tolerance for ambiguity that Chicano-*mexicanos*, people of mixed race, people who have Indian blood, people who cross cultures, by necessity possess"(ibid.)とも述べる。異人種と異文化の混交を象徴すると同時に、混交の結果生まれた曖昧性を受け入れる姿勢を象徴するのがグゥアダルーペの聖母だということであろう。それゆえに、聖母はチカーノ/メキシコ系のエスニック・アイデンティティの象徴ともなっているというのである。しかし Anzaldua の場合、そのハイブリッドなメスティーソとしてのアイデンティティの根幹には"Indian ancestry"

"Indian blood" がなくてはならないようだ。すでに見た「インディアンの遺伝子」である。この生物学的要素は必要条件であり、アイデンティティを決定づける「本質」なのである。ここでもメキシコ系は "my race" と表現されていて、先に見た "racial entity" "distinct people" という表現と呼応する。インディアン性を欠かせない要素として含むハイブリッド性あるいは「統合性 ("synthesis")」 ゆえに、「独自の ("distinct")」エスニシティをもつのがメキシコ系だということである。1960 年代、70 年代のチカーノ・ナショナリズムの流れを汲む考え方と言ってよいだろう。それは、"We know what it is to live under the hammer blow of the dominant *norteamericano* culture. But more than we count the blows, we count the days the weeks the years the centuries the eons until the white laws and commerce and customs will rot in the deserts they've created, lie bleached" (63-64)という物言いからも伝わるように、白人アングロ("*norteamericano*") に対するルサンチマンとでも呼ぶほかない感情に彩られたナショナリズムである。そして、*Borderlands* の前半部を締めくくるのは、テキサス南部に触れた、ルサンチマンとノスタルジアとユートピア的ヴィジョンが綯い交ぜの"This land was Mexican once / was Indian always / and is. / And will be again"(91)という短詩である。

Duran はサルトルの名前を挙げて、*Borderlands* にも *Brown* にも "existence precedes essence" という意味での "a sort of existentialism"(141)が見られると指摘する。上述したような Anzaldua の本質主義的傾向を考えると、ともにハイブリッド性を称揚する言辞

が見られるという点を捉えて、彼女と Rodriguez を「実存主義」で括り、共通点として指摘することには違和感が残る。*Days of Obligations* の冒頭で"No one in my family had a face as dark or as Indian as mine"(1) と語っていた Rodriguez のことであるから、自身のインディアン性を意識していたのは間違いない。*Brown* では、Anzaldua が使う"mestizaje" の代わりに"brown" を使って、"[W]hat makes me brown is that I am made of the conquistador and the Indian. My brown is a reminder of conflict"(xii) と、彼も「コルテスとその一団」との衝突に触れはする。しかしその直後に"And of reconciliation"(ibid.)と続けるのである。メスティーソの誕生を「和解(reconciliation)」の結果とする捉え方に、Anzaldua の抵抗の言説との違いが出ている。そして、Rodriguez の場合は、アイデンティティ確認のため、その衝突と和解の時点からさらに時を遡ることはない。そういう意味でのインディアン性を求めたりはしない。これもすでに指摘したことではあるが、Rodriguez は混交が生じた時点に己の起源を定めている（大森 128)。自分のもっとも重要なテーマは "impurity" であると述べたうえで、その"impurity"を体現するメスティーソとしての自分について、"My mestizo boast: As a queer Catholic Indian Spaniard at home in a temperate Chinese city in a fading blond state in a post-Protestant nation, I live up to my sixteenth-century birth" (35) と続ける。「16 世紀の起源に忠実に生きる("live up to my sixteenth-century birth")」とある。それより前の、混交が起こる前の時点に存在したかもしれない purity を求めはしないのだ。引用部分の初めのあたりに "a queer Catholic Indian Spaniard" とあるが、これは Anzaldua にも当て

はまる。Rodriguez はもちろんゲイであることを指して “queer” という単語を使っているわけだが、女性同性愛者である Anzaldua も自分のことを指すのに頻繁にこの単語を使っている。メスティーソ (“Indian Spaniard”) という人種的 “impurity” に加えて、カトリックでありながらゲイ（レズビアン）でもあるということで、“impurity” の度合はさらに高まる。その Rodriguez が「居心地良く(“at home”)」暮らしているのは、さまざまな宗教・宗派が混在するようになったポスト・プロテスタントの U.S.A.であり、白人が少数派になりつつあるカリフォルニア（“a fading blond state”）であり、中国系で溢れる街サンフランシスコ（“a temperate Chinese city”）なのである。自身のハイブリッド性あるいは mestizaje（混血性）についての考察を出発点としてはいるものの、それはあくまでも出発点であり、Rodriguez はメキシコ系に限定せずアメリカ全体に目を向ける。アメリカ自体が impure になりつつあることを語る。たとえば WASP などという表現によってかつて想定されていた pure なアメリカ像とは異なるアメリカについて語るのである。*Brown* の 15 年前の 1987 年出版という点は考慮に入れなければならないものの、Anzaldua の *Borderlands* には、アメリカの主流としての、そして実体としての WASP の存在を前提としつつ、それを意識しそれと区別されるものとしてメキシコ系の「独自性」が語られる、という趣きがある。メキシコ系を“my race”と呼ぶことなど決してしない Rodriguez の場合、そのメキシコ系について触れる場合でも、WASP、チカーノというような分類はしない。たとえば *Brown* での次の文章。

> I noticed the woman withdraw from the reception line. She waited to be the last to approach me after a lecture I gave in a Congregational church in Pasadena. Her face, at one angle, described a Toltec carving. Then, a slight shift of her chin transported the eye to Kyoto. I had been speaking of brown—still testing my own use of the term. The Japanese-Mexican woman had a brown story as well. She grew up feeling herself neither Japanese nor Mexican (because both), in a black neighborhood of Southern California. (220)

Brown 出版の何年か前に行なった講演会でのエピソードと推測できる。"still testing my own use of the term" の"term" とはもちろん brown のことであり、その言葉を中心概念として用いて本を出版することの適切性を瀬踏みしながら行なった講演だったということである。カトリックの Rodriguez がプロテスタントの一派である会衆派教会（"a Congregational church"）に出向いて講演を行ない、聴衆のなかにいたメキシコ系でありながらプロテスタントの女性信者と会話する。そのことだけでもすでに混交あるいは交流を、異文化の交わりを感じさせる。女性信者の顔立ちを表現するのに使われている "Toltec"とは、アステカ族に先んじてメキシコ中部を支配していたとされるトルテカ族のことを指す。インディアン（インディオ）の面影を残す顔立ちだったということである。そのあとの "a slight shift of her chin transported the eye to Kyoto" は、顎のわずかな動きで角度が変わると、日本人を

思い起こさせる風情が目元に漂う、ということを表現しているのであろう。“Japanese-Mexican”とあるが、正確を期せば Japanese-Mexican-American ということになる。いや、Mexican であることですでにメスティーソなのだから、人種的に正確を期そうとすればさらにハイフンの数が必要で、Japanese-Indian-Spaniard-American である。しかも、この段落は、その女性は「黒人居住区(“a black neighborhood”)」に生まれ育ったと結ばれている。彼女には黒人の血も流れている可能性を否定できないということである。となれば、ハイフンをもう一つ加えて、Japanese-Indian-Spaniard-African-American としなければならない。ゴルファーの Tiger Woods が自分の混血性を指して用いた Cablinasian (Caucasian-Black-Indian-Asian) という有名な造語を想起させる。それが彼女の“brown story”だというのである。story of impurity と言い換えてもよい。

このように、brown あるいは impurity の具体例として自身と同じメキシコ系を取り上げ、ナワトル語由来の“Toltec” というメキシコに固有の先住民の名前を挙げても、そのことによってインディアン性を強調するということは、Rodriguez の場合はない。上の引用のメキシコ系女性の例でも、“feeling herself neither Japanese nor Mexican (because both)” とあるように、自己を構成する複数の要素のうちのどれか一つを選び重視することで帰属意識が生まれ、エスニック・アイデンティティが確認される、という道筋を辿らない。どちらでもあるがゆえにどちらでもないという複合性と雑多性を受け入れて生きている具体例なのだ。そのような在り方が、つまり browning のプロセスが、

通常 brown people と呼ばれるメキシコ系の人々の間でさえ進行しつつあるというのが Rodriguez の観察である。実際、Hector Torres とのインタビューで Rodriguez は、最近メキシコ系の人口が急増していると言われるサウス・カロライナのメキシコ系コミュニティに触れて、"The real browning of America is that they [Mexican-Americans] are Mormons, and they're Evangelical Protestants. It's that they are impure" (Torres 294)と述べている。メキシコ系のモルモン教徒とメキシコ系の福音派プロテスタント。異人種混交というより異文化混交であるわけだが、もちろん Rodriguez はこのような事態を、つまり brown people と呼ばれる人々も混濁の度合を高めていくという意味での browning を、肯定的に捉えている。

Brown での先ほどの"Japanese-Mexican" のエピソードの直後には次のような文章が置いてある。

> I meet teenagers—like the "Blaxican" in Riverside or the "Baptist Buddhist" in Atlanta—I meet them everywhere, at every gathering I attend, people who tell me they grew up alone. Because they didn't belong. Because they belong to too many. . . . An African-American woman I met at a wedding told me that when she was a girl in Texas her best friend demanded of her, who was that woman I saw you walking with? The white woman was her grandmother. (221-222)

"Blaxican" とは Black-Mexican のことである。"Japanese-Mexican" の

場合と同様に、メキシコ系に見られる異人種混交がいかに多様な形で表れるかが示される。そして、これはメキシコ系とは限定できないが、アメリカには「バプテスト派の仏教徒(Baptist Buddhist)」を名乗る若者たちさえいるという。宗教の形をとった西洋文化と東洋文化の異種混交とでも呼ぶべきであろうか。いずれにせよ、このようなエピソードを挿入する Rodriguez の狙いは明らかで、"Japanese-Mexican" の女性のエピソード同様に、人種、民族、宗教いずれであれ、複数のものに属しているがゆえに固定した単一の帰属先を見つけられず「仲間ができなかった("grew up alone")」 者たちが増えているということである。引用後段は、"African-American" でありながら祖母は白人という女性のエピソードで、これも異人種混交の産物の具体例である。人種的区分でいえば黒人なのか白人なのか、その両方であるがゆえにどちらとも一体化できず、アイデンティティの危機に陥ったこともあるのであろう。Rodriguez によれば、"Blaxican" も"Baptist Buddhist"も、そして"a white woman"を祖母に持つ"African-American" の女性も、みな brown ということになる。

ここまでだけでも、Rodriguez が使う比喩としての"brown" の適用範囲の広さ、その射程の長さを窺い知ることができる。しかし、*Brown* がアメリカ全体の混交と混濁を称揚する書であることを考えれば当然のことではあるのだが、その幅広さを示す例はほかにも随所に見られる。サクラメントでの子ども時代を回想する冒頭のあたりでは、"brown people" の例としてフィリピン系やインド系のシーク教徒を挙げ(5)、さらには、たばこ屋を営んでいたベツレヘム生まれのパレス

チナ系の男性を“as brown as a rolled cigar” (6)と表現する。国境の南だけではなく北にも Rodriguez は目を向け、“Canada is already brown. Vancouver has become an Anglo-Chinese city”(161)と述べたりする。あるいは、“[T]he best English novelist in the world is not British at all, but a Mahogany who lives in snowy Toronto and writes of Bombay” (40)と述べたあとで、“[B]rown writers move ‘between’ cultures”(ibid.) と続ける。ここでは“brown writers”の一人である小説家を褐色の木「マホガニー」に例えて表現している。これはインド系カナダ人の作家 Rohinton Mistry を指しているようである(Torres 293)。バンクーバーについては、先に引用した文章で自身が住んでいるサンフランシスコを “a temperate Chinese city” と表現していたことと重なる。アジア系も包含する browning のプロセスは、合衆国に留まらず、さらに北へと展開しているのである。

別のところには、“The lovely brown woman who has cared for my parents, a Mormon born on an island in a turtle-green sea(I’ve guessed the Philippines or Samoa)” (118) とある。両親の介護をしてくれたフィリピンかサモア出身のモルモン教徒。その女性を “brown woman” と呼ぶとき、Rodriguez は彼女の実際にブラウンの肌を思い浮かべつつ、文化的ハイブリッド性にも思いを巡らしていたのだろう。宅配便の配達人のことは“Ding-dong. It’s the UPS man. The Filipino in shorts” (143)と表現され、自宅の屋根の修理をしている作業員は“Indians stomping around on the roof”(ibid.)と表現される（ここでの “Indians” はインド系)。また、サンノゼから手紙をくれた女性が、“the

daughter of a 'New York Jew' and an 'Iranian Muslim'"(202)と自己紹介したというエピソードも挿入している。人種と文化を横断するこれらすべての現象が Rodriguez にとっての brown/browning ということになる。実際、「ニューヨークのユダヤ人」と「イラン系のイスラム教徒」との間に生まれた娘に触れたあと、"This is what I want to hear about—children who are unnatural to any parish because they belong to no precedent. Brown children are as old as America" (ibid.)と続けている。

こうして見てくると、Anzaldua の *Borderlands* と *Brown* の類似点を指摘する Duran の、"Rodriguez tries to formulate how Hispanics are browning an America that has always defined itself as black and white"(128)という解釈は、的確さと説得力に欠けると言わざるを得ない。上に見たように、Rodriguez 言うところのアメリカの browning を加速させているのはヒスパニックだけではないのだ。"Hispanics are browning an America" という言い方では、単にヒスパニック人口の急増を指して 1980 年代あたりから使われ始めたジャーナリズムや各種メディアの言説となんら変わるところがない。異種混交全般を表す brown という言葉の比喩性が消えてしまう。少なくとも薄められてしまう。

上の引用のすぐあとに、*Brown* と *Borderlands* の共通性を指摘しようとして Duran は "Anzaldua also tries to discover the nature of the *mestiza*, and the process of *mestizaje* that she and her kinfolk embody" (128)と続けている。これは *Borderlands* についての説明としては納得のいくものである。しかし、ここでの"*mestizaje*" が Duran の説明・解釈通りであるからこそ、Rodriguez と Anzaldua は分かれるのだ。Duran は

“kinfolk” という言葉を使っている。「親族、同族」という意味であるが、*Borderlands* の文脈に置いてみれば国境地帯に住む＜同胞＞と解釈してよいだろう。つまりはメキシコ系/チカーノということである。あるいは、すでに何回か引用した Anzaldua 自身の言葉を使うなら、“distinct people” であるところの“my race”である。 Anzaldua の *mestizaje* はあくまでこの“kinfolk”の特徴および独自性として、そして主として“kinfolk”に向けて、語られている。それに対して、繰り返しになるが、Rodriguez が語るのはアメリカ人全体におよぶ異種混交であり browning である。そのことは、“I think of the nation entire—all Americans—as my people. Though I call myself Hispanic, I see myself within the history of African Americans and Irish Catholics and American Jews and the Chinese of California” (128)という一節からも窺える。“my people” の指すものが Anzaldua とは異なるのだ。

もう一点だけ Duran の *Brown* 解釈に対する不満を述べると、先ほども引用した“Hispanics are browning an America” という表現に戻ることになる。この表現について、主語を“Hispanics” とすることの不適切性をまず指摘した。次に指摘したいのはこれが現在進行形で書かれているという点である。アメリカでは 20 世紀末からヒスパニックの急増が注目され、今でも社会問題の一つであるわけだが、“Hispanics are browning an America” という言い方では、browning はせいぜいここ 20 年から 30 年の現象、あくまでも現在の出来事ということになりはしないか。だとすれば、*Brown* の眼目、*Brown* で Rodriguez が主張していることにそぐわない。Rodriguez は時事問題としてのみアメ

リカのハイブリッド化を取り上げているわけではない。*Brown* で Rodriguez は、アメリカでは長い間人種問題が白人対黒人の二元論として捉えられてきたことに異を唱える。その異論は、すでに見てきた引用などからもわかるように、白人、黒人以外の要素もあるという主張なのであるが、しかしそれと同じぐらいのページを費やして彼が強調しているのは、アメリカの歴史は白人と黒人の交わりの歴史であったということである。そのことが、まず"This undermining brown motif, this erotic tunnel, was the private history and making of America"(133)と、またも brown を用いて語られる。そして次のように続く。

> After several brown centuries, I sit on dais, in a hotel ballroom, brown. I do not hesitate to say into a microphone what everyone knows, what no one says. *Most American blacks are not black.* The erotic history of America kept pace with segregation. From the inception of America, interracial desire proceeded apace with segregated history. . . . In spite of dire social prohibitions, white slave owners placed their ancestors in the bodies of their slaves. (134)

これはホテルで開催されたシンポジウムに招かれ、自分の発言の順番が回ってくるまで演壇で座っているときの瞑想という形になっている。"several brown centuries"は「混交の数世紀」と翻訳できるだろう。したがって、"After several brown centuries" は"From the inception of

America” とリンクしている。黒人と白人との間の異人種混交は数世紀に渡って続いてきたことであり、アメリカの歴史の初めまで遡るということである。マイクがまわってきたら“*Most American blacks are not black*” と躊躇せずに言うだろうとあるが、それはつまり、アメリカの黒人はほとんどブラウンだ、と言うことにほかならない。白人の奴隷所有者たちが「先祖の血を奴隷の体に流し込んだ(“placed their ancestors in the bodies of their slaves”)」 奴隷制度の時代から、あるいは建国以前の植民地時代から、browning はアメリカの歴史、“making of America”の本質を成す部分だったということである。単にヒスパニック人口の増加を表わすのでもないし、今も進行中ではあるものの今に始まったわけではないのである。

以上見てきたように、brown/browning の適用範囲は非常に広い。そのことに対して否定的な批評家たちもいる。たとえば Swait Rana は、Rodriguez の brown は“fairly loose and wide-ranging—unidentifiable in fact due to their sheer profusion” (290)であると不満を述べ、Rodriguez が提示しているものは“fantasy of brown universalism”(299)にすぎないと断じている。また、Linda Martin Alcoff は“his real goal [is] to muddy the definitions of race so much that the categories lose their intelligibility”(186)と指摘している。この指摘は *Brown* 解釈としては的を外していない。それどころか Rodriguez の意図のかなり正確な説明になっている。ゆえに、Rodriguez はこのような批判を受けても痛痒を感じないはずである。Alcoff が使っている動詞としての“muddy” は「泥でよごす、濁らせる」という否定的な意味をもつ単語であり、だからこそ Alcoff は

批判の言葉として選んだ。しかし、Rodriguezの"brown"はまさに「濁った状態、混濁」を比喩的に表わす単語であり、それを用いることで人種というカテゴリーが「明瞭さを失って("lose their intelligibility")」曖昧になり、有効性を持たなくなることを示そうとしているのである。序文で宣言するかのように"I extol impurity" "I write about race in America in hopes of undermining the notion of race in America" (xi)と述べ、インタビューでは混交の色brownを、否定的な意味を持つ単語"mess"をあえて用いて"a fine mess of a color"(Hansen 2002) と表現しているRodriguezのことであるから、自ら"muddy" という単語を用いたとしても不思議ではない。

III

あまりにも多くのものに所属しているがゆえに、人種であれエスニシティであれ、単一の帰属先を見つけられない brown な人々の増加を示すエピソードをRodriguezがいくつか挙げていることはすでに見た。もう一人のメキシコ系作家・詩人・エッセイストの Alberto Luis Urreaは、人種的な意味で "belong to too many" の具体例である。Urreaのノンフィクションの四冊目で自伝的エッセイ集 *Nobody's Son* にはそのことがよく表れている。ティファナに生まれサンディエゴで少年期を過ごしたUrreaはメキシコ人の父とアメリカ人の母を持つ。彼は金髪碧眼のメキシコ系作家であり、肌の色もブラウンではない。母が白人のアメリカ人なのだから、そのような容貌になる可能性はある。しかし、Urreaの場合、生粋のメキシコ人である父も金髪碧眼だった。

父の肌の色については、"My father was whiter than my mother" (9)とまで言っている。父のフルネームは Alberto Urrea Murray なのだが、そのことに触れて、"Yes, Murray.　Even on my Mexican side, I'm Irish" (17)とあり、スタテン島出身の母 Phyllis については、"Phyllis was English and Scottish and some Hungarian.　Her ancestors were plantation owners in Virginia"(ibid.)と続く。外見は白人夫婦としか見えない二人のはずなのだが、互いの「人種」を軽蔑していて、子供のころの Urrea は"the eternal race war between my gringo mother and my mejicano father" (117)に悩まされた。"You are *not* a Mexican!"(6)と息子に向かって叫ぶ母は、彼の名前が Luis ではなく Louis で、"Louis *Woodward* or Louis *Dashiell.* One of *my* names" (ibid.) であればよかったのに、などと言う。一方父はといえば、"He used to tell me I was no *God-damned gringo.*　I was, however, white.　*Speak Spanish, pendejo!* was a common cry when I spoke some unacceptable English phrase" (8)という次第で、白い肌の息子に向かって「おまえは白人（gringo）ではない」と言い、「(メキシコ人らしく）スペイン語を話せ、馬鹿もん("pendejo")!」と叱りとばす。

その「人種戦争("race war")」において、Urrea がどちら側についていたかというと、父の側、メキシコ人の側である。そのことは、"When I mention my family, I mean Mexicans" (6)とあることからもわかる。合衆国東部に住む母方の一族については、自分も白い肌の持ち主でありながら、わざわざ "white" という単語を冠して"my white relatives back east"(ibid.)と呼び、メキシカンとしての自分との隔たりを強調する。さらに、その東部の親族たちは自分のことを恐れていたに違いないと

言い、その理由を、"I was one of them, but I was also one of *them*" と説明する(7)。二つの them のうち、あとのほうのイタリックで表わされている "*them*" はメキシコ系を指している。母方の親戚から見れば、一族の一員であってもメキシコ系は恐怖の対象として他者化されていたということである。ひいては、アメリカ社会のなかの＜異物＞とみなされていたということであり、Urrea はその＜異物＞であるメキシカンの側に寄り添う。その点では、彼は Rodriguez より Anzaldua の立場のほうに近い。実際、アステカ族への絶ち難い思いが Urrea にもあることを、次の一節は示している。

> Those women, with all their mysteries and their laughter. *Pit-pat, pit-pat. . . .* Their arms—the richest most enjoyable brown—jiggled as they worked. Their hair, deep black, wound into immense braids, lay pinned to their necks or held back by cloth. *Pit-pat.*
>
> They ground the corn in big stone *metates*, both the cone and the stone handed down through generations from the Aztecs, still bearing Aztec names. Their hands repeated the motions of millions of hands and hundreds of years. Their hands, grinding and patting and laying the corn patties upon the hot metal, were a time machine. You could fly back to Tenochtitlan on their palms any day of the week.
>
> They fed us gawking kids. You could hang out at the tortilleria and eat a pound of soft hot tortillas. They'd give them to us plain—good enough! (82)

ティファナで過ごした子ども時代の回想である。トルティーヤ製造所(tortilleria)で陽気に働くメキシコ人女性たちを、その表情、髪、腕、手の動きとともに懐かしく思い出している。"*mutates*"とはトウモロコシを碾くための平らな石のことである。何百年と受け継がれた製法で"*Pit-pat, pit-pat*"と音を立てながらトルティーヤ作りに励む女たちの手はいわばタイムマシーンで、それに乗ればアステカ族が築いた都市テノチティトラン(Tenochtitlan)に戻れる、というのである。かつて暮らしていたティファナでの子ども時代を懐かしみ、その回想によってアステカの過去へと導かれているわけで、二重の意味でノスタルジックな文章である。「インディアンの遺伝子」を強調する Anzaldua に通じるものがある。

しかし、メキシコ系ではあるものの、Anzaldua とは異なりブロンドで青い目の Urrea の場合、己のルーツあるいは血筋を「インディアンの遺伝子」に収斂させることはできない。 Indian か Spaniard かの二者択一でアイデンティティの確認に至ることはできないのだ。自分の"Aryan looks"、つまり＜白人性＞について、彼は次のように説明する。

> If you trace the Urrea bloodline back far enough, you find that our Aryan looks are attributed to the Visigoths, when they entered Spain and generously dispersed gallons of genetic material in every burning village. And one of the Visigoth warriors who blitzed our part of Spain, siring many blond ancestors of mine, was Urias.

Urias—Uria—Uriah—Urria—Urrea. (30)

16 世紀の「コルテスとその一団」のはるか千年も前、西ゴート族 (Visigoth) のイベリア半島侵攻に、Urrea は己の“blond ancestors”の起点を求めている。これは父方のいわば＜ヨーロッパの遺伝子＞である。この遺伝子を受け継ぎ、西ゴート族の時代から雑婚の反復の千数百年を経て、メキシコ西部のシナロア (Sinaloa) 州に生まれたのが Urrea の父であった。父には Phyllis との前にも（おそらくはメキシコ人との）結婚歴があり、それも手伝ってか Urrea は人種的、民族的に多様な親戚を持つことになる。

> My cousin is Apache. My other cousin is Mayo. My second cousin is black. My niece is German. One branch of the Urreas is Chinese. Other Urreas claim to be Basques. One great-grandmother was Tarascan. As I mentioned above, my paternal grandmother was a Murray—Irish. . . . Somebody tell me, please, what a Mexican is.
>
> Mexico—the true melting pot. (30)

“Mayo”と“Tarascan”はともにメキシコの先住民族の部族名、つまりインディアン（インディオ）である。それも含めてここにはアメリカセンサス局の分類による人種がすべて入っている。これが、金髪碧眼で肌の白いメキシコ系 Urrea の血縁であり、彼自身にすべての血が流れているのである。まさに“Mexico—the true melting pot” である。とす

れば、いかにその願望が強かろうと、アステカという単一の民族または人種に源を求め、それと一体化することでアイデンティティを確認することはできない。ルーツ探しは一点に収斂するという道筋を辿らず、逆に、Apache、Mayo、black、German、Chinese・・・・と拡散していく。Urrea 自身が "melting pot"そのもので、彼のなかで複数の血筋・人種が分かちがたく「溶け合って」(melting)いる。

Shane T. Moreman は戻るべき源あるいは場所を持たない Urrea のハイブリッド性、雑種性を、的確に"homeless-hybridity" (360)と呼んでいる。デラシネということだ。*Nobody's Son* で興味深いのは、Urrea が自身のハイブリッド性を言語のハイブリッド性と重ねる形で語っているということである。その点で再び Rodriguez および Anzaldua との比較が可能になる。そして、言語についてのハイブリッド性という点では、Urrea と Rodriguez との間の親和性のほうが強い。

まず Anzaldua であるが、彼女の "mestizaje" の概念および比喩が特定の地域の特定の人々、つまり国境地帯のメキシコ系/チカーノに限定して使われていることはすでに見た。そのことは言語についてもあてはまる。*Borderlands* に"We speak a patois, a forked tongue, a variation of two languages" (55)とあるが、ここで"patois" はチカーノの間での「仲間言葉、隠語」であろうし、"a forked tongue" とは英語とスペイン語の混ざり合った混成言語という意味であろう。"Because we are a complex, heterogeneous people, we speak many languages" (55)という Anzaldua は、チカーノが話す言語として Standard English, North Mexican Spanish, Chicano Spanish, Tex-Mex を含む 8 種類を挙げる(55)。

Tex-Mex とは、もちろんテキサスの国境地帯で話される英語の混じったスペイン語であるが、生育環境のゆえに、自分が親近感を覚えるのは今挙げたうちの最後の二つであるとして、その説明へと続く。Chicano Spanish を中心とする説明は、英語との関係、標準スペイン語との関係を自身の経験を交えながら語るものとなっていて、なかなかに興味深い。英語からの借用語について、"Words distorted by English are known as anglicisms" (56)と語り、スペイン語を毒するものとして否定的に捉える Anzaldua は、その例として"*bola* from ball, *carpeta* from carpet, *machina de lavar* (instead of *lavadora*) from washing machine" (57)などを挙げている。"*lavar* "は動詞の「洗う」で、"*lavadora*"はその形容詞形の「洗う」、つまり"washing" を意味する。英単語をスペイン語風に発音して使う例もいくつか挙げていて、そのような行為を Anzaldua は"the result of the pressures on Spanish speakers to adapt to English" (57)と表現する。言語について語るときも、ドミナントなアングロ文化に対する抵抗の姿勢は鮮明である。

Anzaldua が繰り返し強調するのは、それを使用するチカーノたちと同様、Chicano Spanish は抑圧されはするものの認知はされない "an orphan tongue" "a bastard language" (58)だということである。そして、言語について語るときも、"Chicano Spanish sprang out of the Chicanos' need to identify ourselves as a distinct people" (55)と、メキシコ系/チカーノが「独自の民族」であることが強調される。同じところで Anzaldua は、混成語 Chicano Spanish のことを、チカーノ同士がコミュニケーションをとり合うための"a secret language" (ibid.)であるとも言ってい

る。このように、“we speak many languages” と言ってはいるものの、そして知識人 Anzaldua 自身は英語にもスペイン語にも堪能ではあるものの、彼女が語るのはいわばスペイン語の変種、主としてチカーノ・コミュニティ内部に閉じられた言語についてである。

Urrea はどうであろうか。言語について語るとき、彼もしばしばスペイン語に触れる。しかしそれは英語のなかに組み込まれたスペイン語、今や英語の一部となったスペイン語である。Anzaldua は英語の影響を受けた Chicano Spanish について語るのだが、Urrea の場合はその逆である。主としてメキシコ人をターゲットとした移民排斥運動と連動している英語公用語化運動を揶揄して、スペイン語からの借用語ですでに英語として認知されている単語を 40 語リストアップしてみせる箇所がある。その一部を挙げると、“Coyote” “Marijuana” “Stampede” “Rodeo” “Ranch” “Patio” “Florida” “Nevada” “Alfalfa” “Bronco” “Canyon” “Colorado” “(Beef) jerky” “Vanilla” “Chocolate” などである(13-14)。一行に一語ずつ 40 語並べたあとで、“Perfectly acceptable English. Nary an Aztonic word in sight”(14)と結ぶ。ここで“Aztonic” とは、黒人英語がしばしば Ebonics と呼ばれるところから、チカーノ・スラングを表わすのに Aztec と Ebonics を合成して Urrea が作った Aztonics の形容詞形であり、「スパングリッシュの」あるいは「メキシコ英語の」とでも訳すべきものである。したがって、“Nary an Aztonic word in sight” とは、「スパングリッシュなど一語も見当たらない」ということである。スペイン語から借用した単語ながら、すべて文句のつけようのない英語として市民権を得て通用している、というのである。

Urrea はこのあとも、英語という言語がスペイン語に限らず様々な言語から単語を借用していること、つまり英語のハイブリッド性について語る。そのとき、さまざまな異物・夾雑物を取り込んだ雑種言語である英語と、アメリカ社会の異物あるいは不純物として排斥されようとしている移民を重ね合わせて筆を進める。長くなるが引用してみる。

Forget about purifying the American landscape, sending all those ethnic types packing back to their homelands. Those illegal humans. . . . [H]ow will we get rid of all those pesky foreign *words* debilitating the United States?

Those Turkish words (like *coffee*). Those French words (like *maroon*). Those Greek words (like *cedar*). Those Italian words (like *marinate*). Those African words (like *marimba*).

English! It's made up of all these untidy *words*, man. Have you noticed?

Native American (*skunk*), German (*waltz*), Danish (*twerp*), Latin (*adolescent*), Scottish (*feckless*), Dutch (*waft*), Caribbean (*zombie*), Nahuatl (*ocelot*), Norse (*walrus*), Eskimo (*kayak*), Tatar (*horde*) words! It's a glorious *wreck* (a good old Viking word, that).

Glorious, I say, in all of its shambling mutable beauty. People daily speak a quilt work of words, and continents and nations and tribes and enemies dance all over your mouth when you speak. The tongue seems

> to know no race, no affiliation, no breed, no caste, no order, no genus, no lineage. The most dedicated Klansman spews the language of his adversaries while reviling them.
>
> It's all part of the American palaver and squawk. (14-15)

この引用で、"all those pesky foreign *words* " "all these untidy *words*" の "*words*" を people に、"English!" を United States! に置き換えて読むこともできる。英語が多数の言語の混交の産物であること、つまり英語自体の多言語性と同時に、アメリカという国のハイブリッド性が語られているのだ。もちろん、ここまで見てきた Urrea の血筋の上でのバックグラウンドを考えれば、彼個人のハイブリッド性が英語のそれに重ね合わされ同一視されているとも言える。引用のなかの"a quilt work of words" は、「言葉のパッチワーク」とも翻訳できる意味合いで使われている。そういう、世界のあらゆるところからの言葉の寄せ集めとしての英語について、"The tongue seems to know" で始まり、続く七つの単語すべてに"no" を冠した否定文が置いてある。ハイブリッドである英語は区別や分類などせずにすべてを受け入れているということであろうが、"no race" で始まり"no lineage"で終わっている。もちろん、"lineage" は「血筋、血統」のことである。最後にこの単語を持ってきたところに Urrea の思いが表れていると言えよう。いわば混血言語である英語は彼自身の血筋の雑多性、雑種性とパラレルな関係にあるのだ。

上の引用と同趣旨の文章がすぐあとに続いている。

What the hell are we speaking? What language (culture, color, race, ethnicity) is this anyway? Who are we?

Abbot: Aramaic. /*Yo-yo*: Philippino. / *Muslin*: Iraqi. /*Yogurt*: Turkish.

I love words so much. Thank God so many people lent us theirs. . . . When I start to feel the pressure of the border on me, when I meet someone who won't shake my hand because she has suddenly discovered I'm half Mexican (as happened with a landlady in Boulder), I comfort myself with these words. I know how much color and beauty we Others really add to the American mix.

My advice to anyone who wants to close the border and get them Messkins out is this: *don't dare start counting how many of your words are Latin, Baby.*

America—there's a Mexican in the woodpile. (15-16)

"*Abbot*" は「大修道院長」で、"Aramaic" は「アラム語」である。この引用でも、英語の混交性・ハイブリッド性が文化、人種、エスニシティのそれにつながるものとして語られている。"the pressure of the border" とあるが、ここでは、"half Mexican"としての自分を「区別するもの、遮断するもの」という意味合いで使われている"border"であろう。さまざまな外来語が英語に取り込まれすでにその一部となっていることを思うと、外部の者とみなされている「(メキシコ系の) われわれ他者("we Others")」 も、実際はすでにアメリカの一部で、アメ

リカのハイブリッド性を、その彩りをより豊かにすることに貢献している、というのだ。二つ目の“border” は文字通りの「国境」である。“Messkins” とはもちろん Mexicans が訛ったもの。国境の封鎖を主張する移民排斥/規制論者たちに対して、「(スペイン語のルーツである)ラテン語が英語のなかにどれだけ入っているか、聞いて驚くな」というようなことを言っている。最後の“there's a Mexican in the woodpile” は、「思いがけない(隠された)ことがあるもの」を意味する成句 there's a nigger in the woodpile のいわばパロディである。スペイン語のルーツであるラテン語が、ほとんど気づかれることなく混入するという形で英語を、ひいては U.S.A.を、ラテン(アメリカ)化しているということであろう。気づかれようが気づかれまいが、あるいは肯定しようが否定しようが、メキシコ文化は着実にアメリカ文化の構成要素の一つになりつつあるのだ。

IV

“a Mexican in the woodpile” というパロディ化された比喩表現で思い出すのが、Rodriguez が *Brown* で使っている “Trojan burrito” (112) という表現である。彼の brown/browning は人種だけではなく言語にも適用されるものとして使われていて、スペイン語の英語への混入を「トロイのブリート」と、「トロイの木馬」をパロディ化した形で表現している。「ブリート」とは、肉、大豆、チーズその他をトルティーヤで巻いたメキシコ料理のことである。したがって、「トロイのブリート」は、知らず知らずのうちにアメリカに入り込むスペイン語で

あり、同時にそれをアメリカに運び込むメキシコ系/メキシコ人を指す。アメリカ英語の特色を「雑食性(omnivorous)」に求める Rodriguez が、そのハイブリッド性の説明にページを費やしていることもすでに指摘したとおりである（大森　147-151)。Anzaldua が言語における異種混交の例として取り上げていたのは主として Chicano Spanish であった。英語に焦点を合わせ、そのハイブリッド性について語るという意味では、Urrea と Rodriguez との間のほうに共通する点が多い。先ほど引用した文章の出だしは、移民と彼らが持ち込む言語に触れて、"Forget about purifying the American landscape" と命令文の形で始まっていた。"purifying" に反対しているという意味で、あるいはその不可能性を語っているという点で、"impurity" を称揚している Rodriguez に通じる。*Brown* の序文では "It is that brown faculty I uphold by attempting to write brownly.　I defy anyone who tries to unblend me" (xi) とも言っている。"brownly" も "unblend" も辞書にはない Rodriguez 独特の使い方である。ここで "unblend" は purify とほぼ同義であろう。ならば、彼も Urrea と同様 "purifying" に反対なのである。

実際、Rodriguez はインタビューで、"[T]hose languages that are going to become global languages are the brown languages, or the languages that can absorb impurity into themselves" (Torres 289) と、言語についても混濁を表わす brown と impurity の二語を用いて語っている。「雑食性」を特徴とするアメリカ英語の browning は、人種の場合と同様に、アメリカの歴史とともに進行してきたのであり、それはいまや「アメリカ語」であって「英語」ではない、とまで言う。

> Americans do not speak “English.” Even before our rebellion against England, our tongue tasted of Indian—*succotash*, *succotash*, we love to say it; *Mississippi*, we love to spell. We speak American. Our tongue is not something slow and mucous that plods like an oyster through its bed in the sea, afearing of taint or blister. Our tongue sticks out; it is a dog’s tongue, an organ of curiosity and science.(111)

“*succotash*” はトウモロコシを使った料理でナラガンセット族の、“*Mississippi*” はもちろん「大きな川」の意でオジブワ族の言葉に由来している。誇張を伴う言い方ではあるものの、インディアンの言葉も取り込んで本家イギリスにはないアメリカ独自の語彙を増やしてきたことは確かであろう。Urrea も“untidy *words*” のなかにインディアン由来の “skunk” “ocelot”を含めていた。引用後半の「牡蠣」と「犬の舌」の比喩は、「雑食性」ではない、いわば守りの姿勢のフランス語との比較である。「汚れや腫れものができることを恐れて(afearing of taint or blister)」、つまりは不純な (impure) 要素との接触を極力避けて、殻を閉じて海の底深くゆっくりと用心深く動く牡蠣がフランス語なら、犬のように大きく口を開けて舌を突き出し、「好奇心と知識欲(“curiosity and science”)」にまかせて何でも取り込もうとしているのが「我々の言語/舌 (our tongue)」、すなわち「アメリカ語」である、という大意であろう。実際、このあと Rodriguez は、アメリカ英語の「雑食性」を理解していない英語公用語化論者を“nativists”と呼んだうえ

で、公用語化がもたらすものは、最近のフランス語がそうなってしまった“a frightened tongue, a shrinking little oyster tongue” (112)でしかない、と述べている。

Rodriguez は、アメリカ英語を「アメリカ語」に変えるのに寄与した者たちの例として、インディアンばかりではなく奴隷制時代の黒人も挙げていて、“Despite laws prohibiting black literacy in the nineteenth century, the African in America took the paper-white English and remade it . . . making English theirs, making it idiosyncratically glamorous” (18)と讃え、その奴隷たちの行為が刻印されているがゆえに現代の英語は“so cool, so jet, so festival”(ibid.)なのだと述べる。別の箇所でも同趣旨のことが、“African slaves stealing the English language, learning to read against the law, then transforming the English language into the American tongue”(31)と語られている。人種の browning ばかりではなくアメリカ英語の browning も、いわば making of the American tongue も、黒人の存在によって促進されたのである。

スペイン語からの借用で今では英語となっている単語を、Urrea が 40 語挙げていることはすでに指摘した。そしてそのあとで、スペイン語に限らず世界各地の言葉がアメリカ英語に取り込まれていることを示す文章が続くことも見た。インタビューでの Rodriguez の次の発言は、先ほど見た *Brown* での文章とも、Urrea の文章とも重なるところが多い。再度フランス語と比較して、英語の特徴が次のように語られる。

> It [English] keeps taking and taking and taking. When those gringos came across the plains in the nineteenth century, they came upon what was left of the Spanish empire, and here are all these Spanish words thrown over the hills and the valley floors, words for the *arroyo* and the *mesa* and words for *Pueblo*, *Colorado*. The gringos can decide to do one of two things: either decide that these words are not English, and use them, or they can decide that they're going to make them English. They are going to steal them, which is what they did. They took it all of that Spanish into themselves, as they took German, as they took Italian, as they took Yiddish. The American tongue, which is why it's not even English anymore, is so full of so many foreign words precisely because this country had opened itself up, opened its mouth up and swallowed these cultures, . . . (Torres 288-289)

Urrea 同様に、アメリカ英語が多くの "foreign words"を内に含んでいることを指摘している。スペイン語由来のものとしては、かつてのニュー・スペインが合衆国の領土に組み込まれ西部開拓の対象となった歴史に触れつつ、ここでは四つを挙げているのみである。そのうち "Pueblo" はもともと「集落」の意味だったものが都市名となったもの。その Pueblo の所在地は、元来「赤い」を意味していて州名となった "Colorado"の南部である。Rodriguez ゆかりのカリフォルニアについていえば、Los Angeles は言うまでもなく、少年時代を過ごした Sacramento、現在暮らしている San Francisco など、スペイン語由来の

地名、山の名、川の名、道の名を数え上げれば切りがない。これは主として南西部全体についても言えることである。スペイン語を英語に取り込む行為が “steal” という単語で表現されているが、先ほど見たように、黒人奴隷が英語を「アメリカ語」に変える行為を指すのにもこの単語が使われていた。「白人(“gringo”)」の開拓者であるか黒人奴隷であるかを問わず、積極性を表わす言葉としてRodriguezは肯定的に“steal”を使っている。“opened its mouth up and swallowed these cultures” などの表現は、*Brown* で使われている “a dog's tongue” という比喩と呼応している。“steal” “swallowed” “taking” はいずれも、新しくて異質なものを積極的に取り入れて自らの一部とし、変化し続けることを厭わない姿勢を示していて、ほぼ同義である。メキシコ系を“distinct people” と呼ぶ Anzaldua に倣って言えば、アメリカ英語はその言語的 mestizaje（混血性）ゆえに distinct language なのだ。そのことを証明するかのように、言語学者の Edward Finegan は、語彙の面でのアメリカ英語の「独自性」をインディアンの言葉やスペイン語からのものを代表格とする借用語の豊富さに求める解説文を書き(18-23)、そのタイトルを“American English and Its Distinctiveness”としている。

外部の異質なものが自らの血となり肉となるまで取り込んで変わり続けるという姿勢は、アメリカ英語の特徴という文脈のなかで称揚されているわけだが、すでに見てきたように、Rodriguez は文化全般についても同様の立場をとる。*Brown* に否定的な評価をくだす批評家は、まさにそのような立場・見解に焦点を合わせている場合が多い。再度 Beltran を例として挙げれば、“the burden of cultural maintenance”

(58)を回避していること、文化というものを "the link to one's past and people"(ibid.)と捉えていないことが、彼女の Rodriguez 批判の要点である。Beltran が「文化の維持("cultural maintenance")」、「過去と人種/民族 ("past and people")」と言うとき、それはメキシコ系に固有の「文化」であり「過去」ということである。Rodriguez に対する批判としては典型的なものに属するが、Anzaldua にはあるけれども Rodriguez には欠けているものとして批判の対象となる。その欠けているものを Paula Moya は"collective racial identity" (110)、Swait Rana は"collective racial memory"(292) と、ほぼ同じ言い方で表している。いずれの場合も"collective"が"ethnic"と置き換え可能なことは明らかである。まさに異口同音で、要するに Rodriguez にはエスニシティに対する関心、あるいは民族意識が見られないというのである。しかし、そのような批判が根拠としている観点こそが逆に Rodriguez 自身の批判の対象となる。Rodriguez が英語公用語化を唱える者たちを "nativists" と呼んでいることはすでに見たが、一方で彼は 、エスニシティに拘泥するヒスパニックをも"Hispanic nativists" (110)と呼んだりする。さらには、バイリンガル教育支持派のチカーノ活動家たちに向けて "Chicano neo-nationalist"(111) という言葉を浴びせる。"It [English] keeps taking and taking and taking" という、先ほどのインタビューからの引用冒頭部分の直前で、Rodriguez はチカーノ主義の問題点に触れ、"[I]t seems to me to be much too interested in preservation and not enough in acquisition" (Torres 288)と語って不満を表明している。"acquisition" はもちろん "taking" のことであり、開放的で闊達なアメリカ英語について語ろう

とするときに、それとは対照的なものの例としてチカーノ主義（者）をまず挙げるのだ。「(チカーノ) 文化の維持」を軽視しているとチカーノ批評家から批判される Rodriguez が、まさに「維持・保存 (“preservation”」に偏りすぎているという点を突いてチカーノ主義を批判する。

その批判は、Duran と Garcia が肯定的に指摘していた本質主義批判につながっている。たとえば、英語のほうが流暢になりスペイン語をあまり話せなくなった少年期を回想する文章のなかに、“Mexican relatives criticized my parents for letting me ‘lose it [Spanish]’—my culture, they said. (So it was possible to lose after all? If culture is so fated, how could I have lost it?)”(129)という一節がある。「宿命づけられた(“fated”)」という単語を用いての反語的問いかけのなかに、Rodriguez の本質主義への疑念が表れている。この“fated” という単語は、browning のプロセスが自分たちにも及んでいることを認めようとしないアフリカ系を批判するときにも、“[B]lack was fated because black was blood. Blood was essence: black was essence. *Yo, blood!*”. . . [B]lack is now culture (in the fated sense) imposed by blacks(141)と繰り返し使われている。*Brown* ではフランス語が「牡蠣」に例えられていた。purity を失うことを恐れて守りの姿勢に入り硬直化してしまったことを示す比喩だったわけだが、Rodriguez はそれと同様のものを、チカーノ主義も含む人種的・文化的本質主義に見てとっている。生得的であるがゆえに変えがたい「本質」の「維持・保存」を事とする姿勢である。彼がアメリカ英語の可変性をしきりに、そして肯定的に強調する事実は、上述のような

文脈において捉えられるべきであろう。

V

Anzaldua は Chicano Spanish を“a bastard language”“an orphan language”と呼んでいた。U.S.A.では認知・公認されていないということを強調するために選ばれた「私生児言語」「孤児言語」という表現である。エスニシティを重視する Anzaldua は“Ethnic identity is twin skin to linguistic identity—I am my language”(59)と、Chicano Spanish が彼女のアイデンティティを保証することを語り、“Until I can accept as legitimate Chicano Texas Spanish, Tex-Mex and all the other languages I speak, I cannot accept the legitimacy of myself”(ibid.) と続ける。もちろんここで“legitimate/legitimacy” は“bastard” の反意語である。メキシコ系の存在とその言語の認知を求める姿勢が表れている。すでに見た通り、Chicano Spanish も英語を取り込みつつあるのだが、それを Anzaldua は英語による浸食と捉えていた。英語との混交・混成はエスニック・アイデンティティに揺らぎをもたらす不本意でネガティブな現象なのである。

Rodriguez と Urrea はアメリカ英語を対象としてその混交に焦点を合わせていたわけだが、彼らが語るアメリカ英語にも“bastard” という単語を冠することができるのではないか。“bastard”という単語は、「私生児」から転じた「雑種」、すなわち「ハイブリッド」という意味も併せ持つ。Rodriguez 言うところの“brown language” は、その「雑食性」ゆえにいわば氏素性の知れない言語となったのであり、その意

味で"bastard language" と言い換えることが可能である。多種の言語が入り混ざったがゆえに<親>を特定できない言語である。Urrea の *Nobody's Son* のなかに、"But where is home?　Home isn't just a place, I have learned.　It is also a language. My words not only shape and define my home.　Words . . . *are* home" (12)と語ったあと、"Still, where exactly is that?"(ibid.)と、再び問いを発する箇所がある。帰属先 "home" は単に場所ではないという。言語、言葉こそが"home" であると。とはいえ、その"home" を特定できない。それもそのはずで、"bastard language"であるアメリカ英語に含まれる"words" の「発祥地("home")」は多岐にわたり、Urrea の血筋がそうであるように、一点に収斂していくことはない。そのことを前提として、Urrea は"Words are the only bread we can really share"(58)と語り、続けて"When I say 'we,' I mean every one of us, everybody, all of you reading this" (ibid.)と、人種・民族の違いを越えてすべてのアメリカ人が共有し抱擁すべきものが"words" であることを語る。そして、"For I am nobody's son. / But I am everyone's brother" (59)と続き、第一章は締めくくられるのである。ここでの"nobody's son" という表現が著書そのもののタイトルとなっているわけだが、それは"bastard"あるいは"orphan" と同義である。ここにも、Urrea が己の雑種性とアメリカ英語のそれとを重ねていることが表れている。「誰の息子でもない」、すなわち単一の帰属先を持たないがゆえに"everyone's brother" になれるのであり、使われている接続詞 "But" は Therefore に置き換え可能である。すでに見たとおり、外来の"untidy words" が詰まったアメリカ英語は「血筋("lineage")」を意に介

さない、という趣旨のこともUrreaは言っていた。“nobody's son”という表現にはそのことも含意されていて、だからこそ“words” を皆で共有できるのだ。アステカの過去に魅了される文章とともに Ku Klux Klanへの言及などがあり、“half Mexican”として味わった被差別体験も挿入されている*Nobody's Son*には抵抗の言説という要素もある。分け隔てなくさまざまな言葉を取り込むアメリカ英語に、アメリカ社会の現実はまだ追いついていないという認識の反映であろう。しかし、Anzalduaは“lineage” にもIndianという単語を冠して“[E]ach of us must know our Indian lineage”(*Borderlands* 86)と述べるのだが、Urreaにはそれほどのエスニック・アイデンティティへのこだわりはない。「インディアンの遺伝子」が強調されることはない。できないのだ。

Rodriguezが人種の面でも言語の面でも異種混交を称揚し、それを“browning”と表現していることは繰り返すまでもない。アメリカの言語は英語ではなくもはや「アメリカ語」である、とまで言う彼は、それを*Brown* のなかで“a dog's tongue” と比喩的に表現していた。別のところには、“Our lewd tongue partook of everything that washed over it; everything that it washed” (112)とある。“lewd tongue” は「好色な言語」とでも翻訳できるであろうか。「雑食性」に通じるわけであるが、アメリカの歴史を“erotic tunnel” と表現したりもする、いかにもRodriguezらしい言い方である。彼は“Only further confusion can save us” (143)とも述べている。一見すると逆説的な表現だが、人種の壁の「混乱」こそが救いをもたらすという、至極まっとうな主張である。“confusion”は“browning”の言い換えにほかならない。線引きによる人

種・民族のカテゴリー化の無効性を Rodriguez は唱えている。その「混乱・混交」の度合を高めつつあるアメリカにあって、彼によればアメリカ英語以外の何物でもない“Hispanic” という言葉の“deconstructing” (143)の作業に従事し、そのことで “I celebrate my own deliverance from *cultura*; the deliverance of the United States of America from race”(ibid.)と述べて、“The Third Man” と題された第六章は締めくくられる。“deliverance” はもちろん「救済・解放」の意であるが、最後の「合衆国の人種からの解放」の前に「文化からの解放」と言うとき、culture ではなくあえてスペイン語の “*cultura*” を用いている。その意図は明白で、Rodriguez がエスニック・アイデンティティや文化的差異を称揚する立場からは遠い地点にいることをここでも確認できる。Duran などによる共通性の指摘にも拘わらず、Anzaldua と Rodriguez の＜差異＞はやはり大きいと言わなければならない。

＊本稿は第 31 回甲南英文学会研究発表会（2015 年 7 月 11 日、甲南大学）で行なった発表を大幅に加筆・修正したものである。

Works Cited

Alcoff, Linda Martin. “Comparative Race, Comparative Racisms.” *Race or Ethnicity?: On Black and Latino Identity* Ed. Jorge J.E. Garcia. Ithaca: Cornell UP, 2007: 170-188. Print.

Aldama, Frederick Luis. *Brown on Brown: Chicano Representations of Gender, Sexuality, and Ethnicity*. Austin: U of Texas P, 2005.

Anzaldua, Gloria. *Borderlands/La Frontera: The New Mestiza*. San Francisco:

Spinster/Aunt Lute, 1987. Print.

Aranda Jr., Jose F. *When We Arrive: A New Literary History of Mexican America.* Tucson: U of Arizona P, 2003. Print.

Beltran, Cristin. "Racial Shame and the Pleasure of Transformation: Richard Rodriguez's Queer Aesthetics of Assimilation." *Aztlan: A Journal of Chicano Studies* 37.1(2012): 37-64. Print.

Duran, Isabel. "The Brown/Mestiza Metaphor, or the Impertinence Against Borders." *Border Transits: Literature and Culture across the Line.* Ed. Ana M. Manzanas. Amsterdam: Rodopi, 2007: 119-145. Print.

Finegan, Edward. "American English and its Distinctiveness." *Language in the USA: Themes for the Twenty-First Century.* Ed. Edward Finegan and John R. Rickford. Cambridge: Cambridge UP, 2004: 18-38. Print.

Garcia, Michael Nieto. *Autobiography in Black & Brown: Ethnic Identity in Richard Wright & Richard Rodriguez.* Albuquerque: U of New Mexico P, 2014. Print.

Hansen, Suzy. "The Browning of America." (An Interview with Richard Rodriguez) *Salon.com Books*, 27 Apr. 2002. Web. 19 Apr. 2004.

Lim, Jeehyun. "I Was Never at War with My Tongue." *Biography* 33. 3 (2010): 518-542. Print.

Moreman, Shane T. "Memoir as Performance: Strategies of Hybrid Ethnic Identity." *Text and Performance Quarterly* 29. 4 (2009): 346-366. Print

Moya, Paula M. L. *Learning from Experience: Minority Identities, Multicultural Struggles.* Berkeley: U of California P, 2002. Print.

Perez-Torres. *Mestizaje: Critical Uses of Race in Chicano Culture.* Minneapolis: U of Minnesota P. 2006. Print.

Rana, Swait. "Reading Brownness: Richard Rodriguez, Race, and Form." *American Literary History* 27. 2 (2015): 285-304. Print.

Rodriguez, Richard. *Brown: The Last Discovery of America.* New York: Viking, 2002. Print.

-------. *Days of Obligation: An Argument with My Mexican Father.* New York: Viking, 1992. Print

-------. *Hunger of Memory: The Education of Richard Rodriguez.* New York: Bantam, 1988 [New York: Godine, 1982]. Print.

Saenz, Bejamin Alire. "In the Borderlands of Chicano Identity, There Are Only

Fragments." *Border Theory: The Limits of Cultural Politics.* Ed. Scott Michaelsen and David E. Johnson. Minneapolis: U of Minnesota An P, 1997: 68-96. Print.

Torres, Hector A. "I Don't Think I Exist." (An terview with Richard Rodriguez) *Conversations with Contemporary Chicana and Chicano Writers.* Albuquerque: U of New Mexico P, 2007:275- 314 Print.

Urrea, Luis Alberto. *Nobody's Son: Notes from an American Life.* U of Arizona P, 1998. Print.

大森義彦『アメリカ南西部メキシコ系の文学―作品と論評』、英宝社、2005 年。

A Survive-minimalist Approach to the Japanese Right Periphery: The Case of Modals

Minoru Fukuda

ABSTRACT

As discussed by Saito (2015), modals, complementizers, and discourse particles serve as categories occupying the right periphery in Japanese. Showing that c(ategorial)-selection rather than s(emantic)-selection plays a significant role in constructing the right peripheral domain, the present paper focuses on Japanese modals, aiming to identify their Feature Matrices, i.e. their hierarchically ordered sets of features for structure building (Stroik and Putnam (2013)). The proposed analysis enables us to circumvent the problem of over-generation, which arises from the assumption that Merge applies freely (Chomsky (2013), Narita (2011)), as well as to dispense with the Uniqueness Condition (Ueda (2007), Saito (2015)), which prohibits multiple occurrences of modals. One implication of this new approach is that the right periphery occupied by other categories such as discourse particles can also be derived in a similar crash-proof manner.

1. Introduction

The analysis of the right peripheral domain of clausal structure, referred to as the right periphery, has attracted a great deal of attention in generative research into Japanese syntax (see Endo (2014)). For example, it is argued by Saito (2015) that modals, complementizers, and discourse particles serve as categories occupying the right periphery in Japanese. The present paper deals with Japanese modals, the syntactic position of which is represented in (1).[1]

(1) $[_{\text{ModP}}\ [_{\text{TP}} \ldots [_{v\text{P}} \ldots v]\ \text{T}]\ \text{Mod}]$

On the assumption that modals consist of two subclasses, i.e. U(tterance)-modals and E(pistemic)-modals, Ueda (2007) argues that they do not co-occur in the same utterance (ibid.: 269), and that U-modalP dominates E-modalP in clausal structure (ibid.: 275). Saito (2015) generalizes the Uniqueness Condition, which prohibits multiple occurrences of modals in the same clause, from Ueda's observation.[2]

From a theoretical perspective, Saito and Haraguchi (2012) suggest that the relevant structures are derived by Chomsky's (1995a) Merge. Saito (2015) proposes that the application of Merge is sensitive to morphological and s(emantic)-selection properties of lexical items under consideration. We agree with Saito (2015: 256–267) that lexical properties play a crucial role in the determination of the distribution of modals, but we argue that c(ategorial)-selection rather than s-selection is relevant in this respect. We

aim here to clarify how the relevant structure is constructed under the assumption that, contra Chomsky (2013) and Narita (2011), Merge does not apply freely. Any syntactic theory based on free Merge immediately faces problems of over-generation, and general principles such as the Inclusiveness Condition and the No-Tampering Condition do not ameliorate the situation. Assuming Stroik and Putnam's (2013) Survive-minimalism framework, therefore, we claim not only that the right periphery should be derived piecemeal, but that it should also be formed in a crash-proof manner.

This paper is organized as follows. In Section 2, we set out the observations of Ueda (2007) and Saito (2015) with regard to Japanese modals, pointing out the irrelevance of s-selection. In Section 3, we review problems with the free application of Merge. In Section 4, we outline Stroik and Putnam's (2013) Survive-minimalism framework, with particular attention to the Feature Matrix (FM) of a lexical item, according to which syntactic derivation proceeds. In Section 5, identifying the FMs of Japanese modals occupying the right periphery, we illustrate how the constructions in question are derivationally derived, showing that the Uniqueness Condition can be dispensed with altogether. In Section 6, we reiterate our claim, briefly discussing theoretical and empirical implications.

2. Japanese Modals

Ueda (2007) observes that there are two types of Japanese modals, namely U-modals and E-modals, as exemplified in (2).

(2) a. U-modals: *ro/e* (imperative), *(i)nasai* (formal imperative), *na* (negative imperative), *yoo* (invitation), *(i)masyoo* (formal invitation), *yoo* (volition), *mai* (negative volition)

b. E-modals: *daroo* (sumise), *desyoo* (formal surmise), *mai* (negative surmise)

(Saito (2015: 256))

In general, U-modals indicate how a speaker recognizes or evaluates his or her utterance, and imply that the speaker assumes the presence of a hearer of his or her utterance. On the other hand, E-modals indicate the manner of the utterance, and the presence of a hearer of the utterance is not implied (Ueda (2007: 265)). These modals constitute the phrasal categories U-modalP and E-modalP, and the former dominates the latter in clausal structure (ibid.: 275). Typically, these take propositional complements, such as *v*P, TP, and ModP, but their lexical properties do not allow free merger with these propositional categories. Specifically, Saito (2015: 256–261) elucidates the lexical properties of these modals, as summarized in the sub-sections below, in which we provide critical comments on his claim that the distribution of modals is subject to their morphological and s-selection properties.

2.1 *Ro* and *E* (imperative)

The Japanese U-modals *ro* and *e* fulfill the same illocutionary role,

but *ro* is used for verb stems ending in vowels, as shown in (3a), and *e* for those ending in consonants, as shown in (3b).

(3) a. Taroo-wa sore-o tabe-ro
Taroo-TOP it-ACC eat-Imp
"Taroo, eat it."

b. Taroo-wa soko-ni ik-e
Taroo-TOP there-to go-Imp
"Taroo, go there."

Since *ro* and *e* must morphologically be attached to verb stems, rather than to tense or other modals, they take only *v*P as their complement.[3] Other U-modals, such as *(i)nasai* (formal imperative), *yoo* (invitation), *(i)masyoo* (formal invitation), and *yoo* (volition) share this property. If these lexical items took TP or ModP as their complement, intervention effects would result; thus, T and Mod prevent these modals from attaching to verb stems (Saito (2015: 257–258)). For instance, the present tense suffix *ru* prevents merger of *tabe* and *ro* in (4), and ungrammaticality arises.

(4) *Taroo-wa sore-o tabe-ru-ro
Taroo-TOP it-ACC eat-Pres-Imp

Thus, the modals under discussion here, being inside TP, are not

located in the right periphery in the strictest sense, although they do occupy the right-most position in clausal structure.[4]

Two remarks are in order here. First, as argued by Saito (2015: 257–258), the difference in grammatical status between (3) and (4) may be due to morphology, but it can also be argued that the c-selection property of *ro* and *e* induces their direct merger with the verbal projection *v*P. Second, under the assumption that Merge applies freely (Chomsky (2013), Narita (2011)), over-generation is inevitable in principle. Thus, ill-formed constructions such as (4) may be derived without limit, and syntax must rule them out in one way or another after their generation. We will discuss this issue in Section 3, and in Section 5 we propose that such undesirable cases are derivationally blocked, arguing in favor of a genuinely derivational theory with a crash-proof syntax over a mixed theory like the widely recognized version of the Minimalist Program (see Stroik (2009)).

2.2 *Daroo* (surmise) and *Desyoo* (formal surmise)

Daroo and *desyoo* select either present tense or past tense (see (5a)), and therefore they must directly take a tensed proposition, i.e. TP, rather than *v*P or ModP (see (5b) and (5c)).

(5) a. [$_{TP}$ Taroo-wa sore-o tabe-ru /
Taroo-TOP it-ACC eat-Pres /

tabe--ta] daroo/desyoo

eat-Past will

"I guess Taroo will eat/ate it."

b. *[$_{vP}$ Taroo-wa sore-o tabe]

Taroo-TOP it-ACC eat

daroo/desyoo

will

"I guess Taroo eats it."

c. *[$_{ModP}$ Taroo-wa sore-o tabe-mai]

Taroo-TOP it-ACC eat-won't

daroo/desyoo

will

"I guess Taroo won't eat it."

As Saito (2015: 259) observes, adjectival tense markers are compatible with *daroo* and *desyoo*, as illustrated in (6).

(6) a. Soko-no huyu-wa samu-i /

ther-GEN winter-TOP cold-Pres. /

samu-katta daroo

cold-Past will

"I guess the winter there is/was cold"

b. Soko-no huyu-wa samu-i/

ther-GEN	winter-TOP	cold-Pres /
samu-katta	desyoo	
cold-Past	will	

"I guess the winter there is/was cold"

Saito (2015: 259) argues that "*daroo* (and *desyoo*) takes a tensed proposition as a complement and s-selects T" (underline ours), but note that what Saito (2015) observes can also be interpreted as suggesting that the c-selection property of *daroo* and *desyoo*, by which they require a TP complement, contributes to the explanation of (5) and (6). This means that their s-selection property is not at stake with respect to the relevant data.

2.3 *Na* (negative imperative) and *Mai* (negative volition)

Na and *mai* take TP (see (7a)), but neither *v*P nor ModP (see (7b) and (7c)), as a complement.[5]

(7)	a.	$[_{TP}$ Taroo-wa	sore-o	tabe-ru]	na	
		Taroo-TOP	it-ACC	eat-Pres.	don't	
		"Taroo, don't eat it."				
	b.	$*[_{vP}$ Taroo-wa	sore-o	tabe]	na	
		Taroo-TOP	it-ACC	eat	don't	
		"Taroo, don't eat it."				
	c.	$*[_{ModP}$ $[_{TP}$	Taroo-wa	sore-o		

	Taroo-TOP	it-ACC
tabe-ru]	daroo]	na
eat-Pres.	will	don't

"Taroo, don't eat it."

In addition, the TP complement of *na* must be headed by future tense rather than past tense or adjectival present, as exemplified in (8a) and (8b).

(8)	a.	*[$_{TP}$	Taroo-wa	sore-o	tabe-ta]	na
			Taroo-TOP	it-ACC	eat-Past	don't

"Taroo, you should not have eaten it."

b.	*[$_{TP}$	Taroo-wa	kimuzukasi(-i)]	na
		Taroo-TOP	difficult(-Pres.)	don't

"Taroo, don't be difficult."

Saito (2015: 269) points out the difference between the tense suffix *ru* in (7a) and the adjectival tense marker *i* in (8b). With regard to *ru*, (9) illustrates that it can refer to the future as well as the present, as it is compatible with the future expression *asita* "tomorrow."

(9)	Hanako-wa	asita	wani-o
	Hanako-TOP	tomorrow	alligator-ACC
	tabe-ru		

eat-Pres.

"Hanako is going to eat alligator meat tomorrow."

In contrast, the adjectival tense marker *i* cannot co-occur with the future expression *asita*, as shown in (10), which implies that it invariably indicates present tense.

(10)	*Taroo-wa	asita	kimuzukasi-i
	Taroo-TOP	tomorrow	difficult-Pres.
	"Taroo will be difficult tomorrow."		

The above discussion leads Saito (2015) to conclude that (8b) is ungrammatical because "*na* s-selects future tense" (ibid.: 260) but its s-selection property is not fulfilled by the adjectival tense marker *i*. However, this argument raises a question with regard to the selection properties of *na*. As discussed by Grimshaw (1979), the verb *ask* s-selects the semantic type of Q(uestion) for its complement, and Q is realized as either DP (e.g., *He asked the time*.) or CP (e.g., *He asked what time it was*.). Thus, if *na* consistently selects a semantic type of Future, it is natural to expect that it should be able to select the lexical item *asita* "tomorrow" as well. However, this expectation is not borne out, as shown in (11).

(11) *Asita na
tomorrow don't

Clearly, (11) is ungrammatical because *asita* is DP rather than TP, which implies that the categorial status of a complement merged with *na* should not be ignored. Thus, we propose here that it is c-selection rather than s-selection that accounts for the ungrammaticality of (11), as well as the grammaticality of (7a). In other words, as an idiosyncratic property, the modal *na* c-selects a specific category type of T that indicates "future." This proposal sounds natural if we consider the uncontroversial observation that the complementizers *that* and *for* select the tensed T and the non-tensed T, respectively. In terms of this new analysis, we will re-examine (7) and (8) in Section 5.

2.4 The Uniqueness Condition

On the basis of the ungrammaticality of (7c), Ueda (2007) argues that U-modals and E-modals cannot co-occur. Taking the ungrammaticality of (5c) into consideration, Saito (2015) argues for the Uniqueness Condition, which prohibits modals from taking another ModP as their complement. He also argues that this condition follows from the morphological and s-selection properties of modals. The observations summarized in the three preceding sub-sections could be regarded as confirmation for Saito's claim, but we argue in Section 5 that the Uniqueness Condition can readily be deduced from

the c-selection properties of modals.

3. Minimalist Assumptions

Despite the descriptive accuracy of Saito's (2015) observation, several questions arise with regard to the analysis outlined in Section 2. We point out two of these here.

First, under the Minimalist Program (Chomsky (1995b)), it is generally assumed not only that the syntactic derivation proceeds in a bottom-up fashion, as well as a bit-by-bit fashion, but also that it proceeds in the most economical manner. However, it remains unclear how the optimal structure of the right periphery is derived. More specifically, the question arises as to how the lexical properties of modals are satisfied in the course of the derivation. Any analysis under Minimalism must therefore be completely explicit about the derivational procedure.

Second, if Merge applies freely, as Chomsky (2013) and Narita (2011) suggest, countless ungrammatical outputs may be generated, with only a very few surviving as grammatical ones. This is a problem of over-generation pointed out in Section 2.1. With regard to the Japanese modals examined in Section 2, a small number of the output constructions satisfying the lexical properties would be identified as grammatical, with a large number being filtered out as ungrammatical. To rephrase, legitimate constructions would be nothing but the products of an accident. Indeed, any analysis based on the premise that Merge applies freely inescapably faces this

problem.[6]

As suggested by Cecchetto and Donati (2015: 43), one could argue that the application of free Merge is constrained by general principles, such as the Inclusiveness Condition (given in (12)) and the No-Tampering Condition (given in (13)).[7]

(12) The Inclusiveness Condition

No new features are introduced by C_{HL}. (Chomsky (2000: 113))

(13) The No-Tampering Condition

No elements introduced by syntax are deleted or modified in the course of linguistic derivation. (Narita (2011: 16))

However, note that the two conditions are not sufficiently restrictive enough to prevent over-generation. For example, let us examine the sentence in (14), which is made up of (at least) six items {Taroo-wa, sore-o, *v*, tabe, ru, no}.[8]

(14)	Taroo-wa	sore-o	tabe	ru	no?
	Taroo-TOP	it-ACC	eat	Future	Q

"Will Taroo eat it?"

Since Merge is assumed to apply blindly to the six items, conforming to the two conditions, at least 6! (= 720) combinations are derived,

but only the two, i.e. (14) and (15), whose lexical properties are all fulfilled, are grammatical.[9]

(15)	Sore-o	Taroo-wa	tabe	ru	no?
	it-ACC	Taroo-TOP	eat	Future	Q

"Will Taroo eat it?"

In Sections 4 and 5, we attempt to solve the problem of over-generation, as well as clarifying the derivational procedure for the right periphery. This is made possible by departing from the mainstream of the Minimalist Program toward Stroik and Putnam's (2013) Survive-minimalism.

4. Feature Matrices

At a descriptive level, we agree with Saito (2015) that the lexical properties of modals contribute to the determination of their distribution and word order in clausal structure, i.e., the properties instruct syntax as the derivation proceeds. However, we pointed out in Section 2 that c-selection properties, rather than s-selection properties, are germane to the data.

Contra Chomsky (2013) and Narita (2011), we do not assume the free application of Merge. Rather, following the general framework of Survive-minimalism proposed by Stroik and Putnam (2013), we assume that its application is strictly driven by the checking requirements of lexical items in the Numeration (NUM).[10]

Survive-minimalism is a particular version of the Minimalist Program, and thus complies with the general Minimalist guidelines. However, it departs from the mainstream of the Minimalist Program in certain notable respects. For example, it constitutes a genuinely derivational theory with a crash-proof syntax, and therefore rejects look-back mechanisms like the Phase-Impenetrability Condition and extraneous operations like Internal Merge.

With regard to the derivational procedure of the computational system, the Feature Matrix (FM) of a lexical item, such as that illustrated in (16), plays a significant role in Survive-minimalism. Specifically, lexical items are introduced to the Syntactic Derivation (SD) in compliance with the structured order of the FM until all features of the lexical items in NUM have been checked. The features in the FM are hierarchically arranged; thus the checking operation proceeds in the order specified by the FM. A sub-categorization (SUBCAT) feature checks a specific category feature, indicated in (16) as CAT (e.g. D, V, *v*, T, M(odal), etc.). The selecting performance system features (PSFs) are features that check specific features that are indicated as selected PSFs (e.g. Case, Q(uestion), WH, etc.).

(16) FM: <SUBCAT <selecting PSFs <CAT <selected PSFs >>>>

(Stroik and Putnam (2013: 42, 84))

The hierarchical structure of the FM instructs the checking operation

between SUBCAT and CAT to occur prior to the checking operation between selecting and selected PSFs. In particular, checking features such as SUBCAT and selecting PSFs cannot be independently introduced to the SD. Rather, their introduction is driven by the presence of unchecked features, such as CAT and selected PSFs in the SD. Therefore, an unchecked CAT feature of a lexical item in the SD invokes the introduction of a lexical item with the SUBCAT feature in a later stage of the derivation. In the same vein, the presence of an unchecked selected PSF motivates the introduction of a selecting PSF to the SD. As a corollary, the first element introduced to the SD has no SUBCAT feature or selecting PSF, but has, at a minimum, a CAT feature.

Survive-minimalism is explicit about the manner in which the SD terminates. According to Stroik and Putnam (2013), the complementizer C, constituting a root clause, differs from the one constituting a complement clause in that it "does not possess any CAT feature that will project and, as a consequence, require further iterative applications of the Copy operation to sustain the derivation" (ibid.: 94). This means that the topmost C has no CAT feature when it is introduced. Stroik and Putnam (2013) also suggest an alternative analysis in which the topmost C constituting the root clause has "an unselectable, performance system-ready CAT feature, *CAT" (ibid.: 85). We assume the latter proposal in this paper.

As is clear from the above discussion, Survive-minimalism successfully explicates how the SD terminates, as well as how it begins. In

line with Stroik and Putnam (2013: 86–89), the step-by-step derivation of constructions like that in (14), reproduced below in (17), can be demonstrated as in (18).[11] It is assumed in Survive-minimalism that the unchecked CAT feature projects when two elements are merged, but the labels of syntactic objects are not shown in (18) because Survive-minimalism presumes a label-free syntax. Labels are therefore used for exposition purposes only.

(17)	Taroo-wa	sore-o	tabe	ru	no?
	Taroo-TOP	it-ACC	eat	Future	Q

"Will Taroo eat it?"

(18) a. Introduction of *sore-o* to SD

i. NUM = {sore-o}

ii. sore-o: FM <CAT-D>

iii. SD: [sore-o]

b. Introduction of *tabe* to SD for checking between SUBCAT-D and CAT-D

i. NUM = {tabe, sore-o}

ii. sore-o: FM <~~CAT-D~~>

tabe: FM <~~SUBCAT-D~~ <CAT-V>>

iii. SD: [[sore-o] tabe]

c. Introduction of *v* to SD for checking between SUBCAT-V and CAT-V

i. NUM = {*v*, tabe, sore-o}

ii. sore-o: FM <~~CAT-D~~>

tabe: FM <~~SUBCAT-D~~ <~~CAT-V~~>>

v: FM <~~SUBCAT-V~~ <SUBCAT-D <CAT-*v*>>>

iii. SD: [[[sore-o] tabe]] *v*]

d. Introduction of *Taroo-wa* to SD for checking between SUBCAT-D and CAT-D

i. NUM = {Taroo-wa, *v*, tabe, sore-o}

ii. sore-o: FM <~~CAT-D~~>

tabe: FM <~~SUBCAT-D~~ <~~CAT-V~~>>

v: FM <~~SUBCAT-V~~ <~~SUBCAT-D~~ <CAT-*v*>>>

Taroo-wa: FM <~~CAT-D~~ <CASE>>

iii. SD: [Taroo-wa [[[sore-o] tabe]] *v*]]

e. Introduction of *ru* to SD for checking between SUBCAT-*v* and CAT-*v*

i. NUM = {ru, Taroo-wa, *v*, tabe, sore-o}

ii. sore-o: FM <~~CAT-D~~>

tabe: FM <~~SUBCAT-D~~ <~~CAT-V~~>>

v: FM <~~SUBCAT-V~~ <~~SUBCAT-D~~ <~~CAT-*v*~~>>>

Taroo-wa: FM <~~CAT-D~~ <CASE>>

ru: FM <~~SUBCAT-*v*~~ < CASE-NOM <CAT-T>>>

iii. SD: [[Taroo-wa [[[sore-o] tabe]] *v*]] ru]

f. Reintroduction of *Taroo-wa* to SD for checking between CASE-NOM and CASE

i. NUM = {ru, Taroo-wa, tabe, sore-o}

ii. sore-o: FM <~~CAT-D~~>

tabe: FM <~~SUBCAT-D~~ <~~CAT-V~~>>

v: FM <~~SUBCAT-V~~ <~~SUBCAT-D~~ <~~CAT-*v*~~>>>

Taroo-wa: FM <~~CAT-D~~ <~~CASE~~>>

ta: FM <~~SUBCAT-*v*~~ < ~~CASE-NO~~M <CAT-T>>>

iii. SD: [Taroo-wa [[**Taroo-wa** [[[sore-o] tabe]] *v*]] ru]]

g. Introduction of *no* to SD for checking between SUBCAT-T and CAT-T

i. NUM = {no, ru, Taroo-wa, tabe, sore-o}

ii. sore-o: FM <~~CAT-D~~>

tabe: FM <~~SUBCAT-D~~ <~~CAT-V~~>>

v: FM <~~SUBCAT-V~~ <~~SUBCAT-D~~ <~~CAT-*v*~~>>>

Taroo-wa: FM <~~CAT-D~~ <~~CASE~~>>

ru: FM <~~SUBCAT-*v*~~ < ~~CASE-NO~~M <~~CAT-T~~>>>

no: FM <~~SUBCAT-T~~ <*CAT-C>>

iii. SD: [[Taroo-wa [[**Taroo-wa** [[[sore-o] tabe]] *v*]] ru]] no]

As shown in (18g), the features of the lexical items in NUM have all been checked, and so the single derived representation shown in (18giii) is transferred to the interfaces, i.e. performance systems, for interpretation.[12]

If Merge were applicable without constraint, as Chomsky (2013)

and Narita (2011) argue, the computational system would have to deal with never-ending generative procedures. By contrast, Survive-minimalism is immune to such problems (see Stroik (2009)). Thus, in the next section, we identify the FMs for the Japanese modals examined in Section 2, arguing that the derivation of the Japanese right periphery can be subsumed under the Survive-minimalist analysis of syntactic computation.

5. Crash-proof Analysis

5.1 *Ro* and *E* (imperative)

On the basis of Saito's (2015) observation, we suggest here that *ro* and *e* have the FM shown in (19).[13]

(19) FM <SUBCAT-*v* <*CAT-M>>

Since *ro* and *e* have SUBCAT-*v*, they directly merge with *v*P, as desired. To put it differently, they c-select *v*. For example, after the derivational stage shown in (18d), in which *v*P is formed, *ro* is introduced to the SD for checking between SUBCAT-*v* and CAT-*v*. This stage of the derivation is shown in (20).[14]

(20) i. NUM = {*ro*, Taroo-wa, *v*, tabe, sore-o}

ii. sore-o: FM <~~CAT-D~~>

tabe: FM <~~SUBCAT-D~~ <~~CAT-V~~>>

v: FM <~~SUBCAT-V~~ <~~SUBCAT-D~~ <CAT-*v*>>>

Taroo-wa: FM <~~CAT-D~~ <CASE>>

ro: FM <~~SUBCAT-v~~ <*CAT-M>>

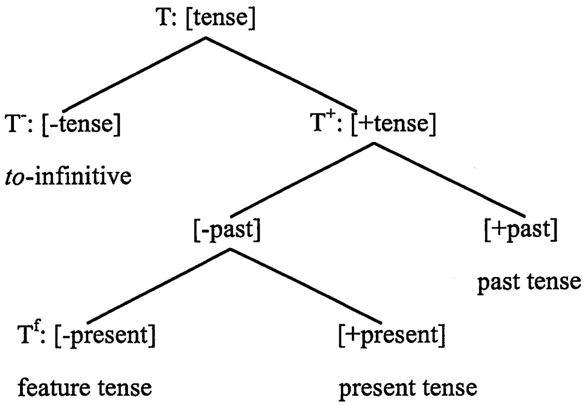
iii. SD: [[Taroo-wa [[[sore-o] tabe]] *v*]] ro]

The proposed FM in (19) suggests that *ro* and *e* resist being merged with TP or ModP. Thus, under our analysis, neither constructions such as (4) nor multiple Mod constructions are derived. The same analysis holds for other U-modals, such as *(i)nasai* (formal imperative), *yoo* (invitation), *(i)masyoo* (formal invitation), and *yoo* (volition).

5.2 *Daroo* (surmise) and *Desyoo* (formal surmise)

In order to capture the selection properties of *na* and *mai* (see Section 5.3), as well as *daroo* and *desyoo*, let us assume that the feature [tense] consists of the dichotomous sub-feature values in (21).

(21)



Following this, the feature of the tensed T selected by *daroo* and *desyoo* can be specified as [+tense], indicated as T^+ in their FM in (22). Thus, *daroo* and *desyoo* c-select T^+.[15]

(22) FM <SUBCAT-T^+ <*CAT-M>>

For example, after TP is constructed, as shown in (18f), *daroo* is introduced to the SD for checking between SUBCAT-T^+ and CAT-T^+. This is illustrated in (23).

(23) i. NUM = {daroo, ru, Taroo-wa, tabe, sore-o}

ii. sore-o: FM <~~CAT-D~~>

tabe: FM <~~SUBCAT-D~~ <~~CAT-V~~>>

v: FM <~~SUBCAT-V~~ <~~SUBCAT-D~~ <~~CAT-*v*~~>>>

Taroo-wa: FM <~~CAT-D~~ <~~CASE~~>>

ru: FM <~~SUBCAT-*v*~~ < ~~CASE-NOM~~ <~~CAT-T^+~~>>>

daroo: FM <~~SUBCAT-T^+~~ <*CAT-M>>

iii. SD: [[Taroo-wa [[**Taroo-wa** [[[sore-o] tabe]] *v*]] ru]] daroo]

The T^+ selection by *daroo* and *desyoo* is a natural consequence of our analysis. Since neither *daroo* nor *desyoo* selects *v*P or ModP as a complement, our analysis again covers the cases to which the Uniqueness Condition applies.

5.3 *Na* (negative imperative) and *Mai* (negative volition)

As observed in Section 2.3, the T head selected by *na* and *mai* indicates future. Therefore, its tense feature can be specified as [+tense, -past, -present] on the basis of (21). If we indicate the T head with future tense as T^f, *na* and *mai* should have the FM depicted in (24), which implies that they c-select T^f.

(24) FM <SUBCAT-T^f <*CAT-M>>

After the derivational step in (18f), for example, *na* is introduced to the SD for checking between SUBCAT-T^f and CAT-T^f, as shown in (25).

(25) i. NUM = {na, ru, Taroo-wa, tabe, sore-o}

ii. sore-o: FM <~~CAT-D~~>

tabe: FM <~~SUBCAT-D~~ <~~CAT-V~~>>

v: FM <~~SUBCAT-V~~ <~~SUBCAT-D~~ <~~CAT-*v*~~>>>

Taroo-wa: FM <~~CAT-D~~ <~~CASE~~>>

ru: FM <~~SUBCAT-*v*~~ < ~~CASE-NOM~~ <~~CAT-T^f~~>>>

na: FM <~~SUBCAT-T^f~~ <*CAT-M>>

iii. SD: [[Taroo-wa [[**Taroo-wa** [[[sore-o] tabe]] *v*]] ru]] na]

It follows from (24) that *na* and *mai* not only take neither ModP nor *v*P as a complement, but also that they do not select a T head whose tense is

not future, as the ungrammaticality of (8) indicates. As anticipated, it is not necessary to adopt the Uniqueness Condition to exclude cases such as (7c).

6. Summary and Consequences

Given the analysis presented in the preceding section, we can explicate the piecemeal derivational stages induced by lexical properties, i.e. the FMs, of the modals under consideration. Thus, we arrive at the same conclusion as does Saito (2015), that the Uniqueness Condition is not an independent, rudimentary principle. However, our conclusion differs from that of Saito in that we regard c-selection as crucial. By adopting Survive-minimalism as a theoretical framework, we have found a way around the problem of over-generation, avoiding the generation of redundant outputs.

Finally, we would like to suggest that our proposed analysis may be extended to other categories located in the right periphery. For example, according to Saito (2015: 268–269), the discourse particle *wa* is located in the right periphery, and it takes TP, whose head can be either verbal tense or adjectival tense, as a complement. However, *wa* takes neither CP nor ModP as a complement, and the clause headed by *wa* is not selected by any other category. Thus, we propose that the FM of *wa* be something like (26).[16]

(26) FM <SUBCAT-T <*CAT-C>>

The FM in (26) ensures that *wa* always takes a TP complement, but

is not selected by any other category because it has *CAT-C, which bans further access to the SD (Stroik and Putnam (2013: 85)).

To conclude, the analysis in this paper paves the way for a new hypothesis that the cartographic analysis can be subsumed under the crash-proof, derivational theory dubbed "Survive-minimalism."

Notes

* This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number 26370570 (Grant-in-Aid for Scientific Research (C)).

1 In (1), ModP stands for Modal Phrase, whose head is indicated as Mod.

2 Saito (2015: 256–257) ascribes the Uniqueness Condition to Ueda's (2007) analysis. However, Saito's (2015) condition is more general than that of Ueda (2007), as it disallows any combination of modals.

3 Evidently, c-selection is also related to this fact. We discuss this issue at the end of this sub-section.

4 However, among the elements appearing in the right periphery, the complementizer *to* and the discourse particle *yo* can follow them. We do not examine these cases in detail in this paper.

5 For reasons of space, we omit examples with the modal *mai* (negative surmise, negative volition).

6 For more discussion of empirical and conceptual problems with the major assumptions of the Minimalist Program, see Stroik (2009) and Stroik and Putnam (2013).

[7] Specifically, Cecchetto and Donati (2015) claim that the application of free Merge is subject to what they refer to as "the Probing Algorithm." We do not review their argument for reasons of space.

[8] For ease of illustration, we assume that *Taroo-wa* and *sore-o*, despite each being made up of a DP and a topic- or case-marker, are single lexical items. For the same purpose, we do not illustrate how the topic feature of *Taroo-wa* is checked in what follows.

[9] Note that (15) can be derived from (14) by means of scrambling or Internal Merge. If we take account of such extra movement operations, an infinite number of constructions will be generated by means of free Merge. We should also note that some of the 6! combinations may sound marginal, but certain functional or pragmatic factors can improve them. For instance, in light of functional syntax, Takami (1995) discusses post-posing constructions, such as that in (i).

(i)	Taroo-wa	tabe-ru	no	sore-o?
	Taroo-TOP	eat-Future	Q	it-ACC
	"Did Taroo eat it?"			

[10] For reasons of space, we do not give an overview of the entire Survive-minimalism framework in this section. We should also note that Stroik and Putnam (2013) no longer assume Merge as a rudimentary structure-building operation, although we continue to use the term "Merge" for genuinely expository purposes.

[11] In (18), the checked features in the FM are struck through, and the copies left behind in the examples are indicated in boldface. We assume once again that *Taroo-wa* and *sore-o* are DPs with a FM of <CAT-D>. We also omit the stages in which

Accusative Case checking occurs in *v*P due to space limitations. Our claim in this paper does not rely on these assumptions.

12 Recall that the feature indicated as "*CAT-C" does not require checking.

13 The feature *CAT-M indicates that it does not have to be checked by other categories, and hence the construction is ready for Transfer. However, since modals such as *ro* and *e* can be selected by the complementizer *to* or the discourse particle *yo*, the feature can be CAT-M. A similar analysis seems to be applicable to the FMs in (19) and (21), although this requires elaboration.

14 To simplify the illustration, we assume the lexical subject *Taroo-wa* in (20). It may well be that the subject position is occupied by an empty pronoun and *Taroo-wa* serves as a vocative.

15 According to (21), the FMs of complementizers *that* and *for* can be indicated as (i) and (ii), respectively, although the categorial status of *for* may be at issue.

(i) FM <SUBCAT-T^{+} <CAT-C>>

(ii) FM <SUBCAT-T^{-} <CAT-C>>

16 It may be controversial that *wa* is categorially C, but we assume so for present purposes.

References

Cecchetto, Carlo and Caterina Donati (2015) *(Re)labeling*, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (1995a) "Bare Phrase Structure," *Binding Theory and the Minimalist Program: Principles and Parameters in Syntactic Theory*, ed. by Gert Webelhuth, 383–439, Blackwell Publishers, Oxford.

Chomsky, Noam (1995b) "Categories and Transformations," *The Minimalist*

Program, 219–394, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquires: The Framework," *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89–155, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (2013) "Problems of Projection," *Lingua* 130, 33–49.

Endo, Yoshio (2014) *Nihongo Katogurafwi Zyosetu* (Introduction to the Cartography of Japanese Syntactic Structures), Hituzi Syobo, Tokyo.

Grimshaw, Jane (1979) "Complement Selection and the Lexicon," *Linguistic Inquiry* 10, 279–326.

Narita, Hiroki (2011) *Phasing in Full Interpretation*, Doctoral dissertation, Harvard University.

Pesetsky, David (1991) "Chapter 1: C-Selection and S-Selection," *Zero Syntax*: vol. 2: Infinitives, Material intended for *Zero Syntax* but not included in the final publication.
<http://web.mit.edu/linguistics/people/faculty/pesetsky/infins.pdf>

Rizzi, Luigi (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," *Elements of Grammar: A Handbook of Generative Syntax*, ed. by Liliane Haegeman, 281–337, Kluwer, Dordrecht.

Saito, Mamoru (2015) "Cartography and Selection: Case Studies in Japanese," *Beyond Functional Sequence*, ed. by Ur Shlonsky, 255–274, Oxford University Press, New York.

Saito, Mamoru and Tomoko Haraguchi (2012) "Deriving the Cartography of the Japanese Right Periphery: The Case of Sentence-Final Discourse Particles," *Iberia* 4 (2), 104–123.
<https://ojs.publius.us.es/ojs/index.php/iberia/article/view/237>

Stroik, Thomas S. (2009) *Locality in Minimalist Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.

Stroik, Thomas S. and Michael T. Putnam (2013) *The Structural Design of Language*, Cambridge University Press, Cambridge.

Takami, Ken-ichi (1995) *Kinoteki Togoron niyoru Niti-eigo Hikaku* (A Contrastive Study of English and Japanese by Functional Syntax), Kurosio syobo, Tokyo.

Ueda, Yukiko (2007) "Nihongo-no Modarithi-no Togokozo to Ninsyo-seigen (Syntactic Structure and Person Restriction of Japanese Modals)," *Nihongo-no Syubun-gensyo* (Main Clause Phenomenon in Japanese), ed. by Nobuko

Hasegawa, 123–150, Hituzi Syobo, Tokyo.

名詞句からの外置とラベルシステム*

古川武史

In this paper I will briefly review Hunter and Frank's (2014) adjunct analysis of Extraposition from DPs, a nonmovement approach, and show some problems of their analysis. I will extend the adjunct approach and demonstrate that given simplest Merge and Labeling Algorithm, Relative Clause Extraposition can be naturally accounted for without recourse to ad hoc stipulations for "rightward movement" phenomena.

1. Introduction

生成文法の研究において名詞句からの外置と呼ばれる現象には主に二つの提案がなされている。

(1) a. I read a book yesterday about linguistics.

b. I saw a boy yesterday that I didn't know.

一つは、右周辺部すなわち文末への移動が関与するという（右方）移動分析(Baltin(1981), Guéron (1980)等)である。もう一つの提案は、外置要素は、移動ではなく、文末に直接導入され、被修飾要素と何らかの解釈規則により関連づけられるという基底生成分析(Culicover & Rochemont (1990), Rochemont & Culicover(1990)等)である。

右方移動分析では、左方移動の局所性・境界性の違い、右方移動の随意性、移動を駆動するものは何か、構造上どの位置へ移動し、また、なぜその位置へ移動しなければならないのかなど、右方移動の特異性について説明が必要となる。一方、基底生成分析の下では、外置要素とその被修飾要素の依存関係を説明する必要がある。

本稿において外置現象のうち、特に関係節の外置に絞り、以下の論点に沿って議論を進めていく。

(2) ① 名詞句からの外置には、移動が関わるのか、それとも基底生成なのか。 【派生の問題】

② 外置要素とその被修飾要素の依存関係はどのようにとらえられるか。 【局所性の問題】

③ ラベル付けアルゴリズム(Labeling Algorithm)はどのように外置要素に適用されるのか。【ラベルの問題】

最近のミニマリスト・プログラムの想定（Chomsky(2013,2014)）では、内的併合(Internal Merge)、外的併合(External Merge)は同じ併合(Merge)という単一の操作とされ、併合が自由に適用されるとする最簡潔併合(Simplest Merge)という立場が取られている。その結果構築された構造はトランスファー(Transfer)や解釈のためにフェーズ(Phase)レベルで評価されると考えられている。

(3) Operations can be free, with outcome evaluated at the phase level for transfer and interpretation at the interface.

(Chomsky2014: 11)

この想定(3)が正しいとするならば、外置要素(EX)は、フェーズ単位で、つまり、同一のフェーズ内で被修飾要素と適切に関連づけられなければならないことになる。[1]

本稿では、特別な規定を設けずに名詞句からの外置の分析が可能かどうかを考察する。

２節では、Hunter and Franks(2014)の付加詞分析を概観し、問題点を指摘する。3節では最近のミニマリスト・プログラムの枠組の最簡潔併合、およびラベルシステムによって名詞句からの外置がどのよう

に説明されるかを検討し、新たな分析を提案したい。4節は本稿の結論となる。

2. Hunter & Franks(2014): Extraposition as flexible linearization of adjuncts

Hunter and Franks(2014)の提案を確認しておこう。

(4) ① 名詞句から外置された関係節の派生には移動は関与しない。

② 名詞句からの外置は、付加詞のフレキシブルな線状化(linearization)と同じ現象である。

③ 外置の統語特性は、循環的解釈(Cyclic Interpretation)が適用されることで説明できる。

Hunter and Franks(2014)のスペルアウト(Spell-Out)は、最大投射が完成するたびに直ちにインターフェース(Interfaces)に送る操作であるとしている。一旦スペルアウトされるとその最大投射の内部構造は見えなくなるが、意味的情報、音韻的情報とその後の構造構築に必要な形式素性は利用可能な状態にある。つまり、スペルアウトされた後は、最大投射単位で意味部門と音韻部門に送られ、それぞれの部門で意味合成(semantic composition)と線状化が循環的に適用される。

2.1 Late Merged Adjuncts = Extraposed Elements (EXs)

名詞句から外置は、副詞の振る舞いに見られるフレキシブルな語順と同じ現象としている。下位付加詞(low adjunct)は、VP 内部にあるが、一方、上位付加詞(high adjunct)はVPよりも上位にある。つまり、上位付加詞はVPから外置された要素として捉えている。

(5) a. [$_{VP}$ Read books *quietly*] (is what) John did.

b. [$_{VP}$ Read books] (is what) John did [*quietly*].

この主張は、項と付加詞の再構築効果の有無の違いを基にしている。付加詞は、(6a)にあるように *wh* 移動後に移動先で遅発併合(Late Merge)が可能であるが、一方、(6b)の項は遅発併合が許されない。

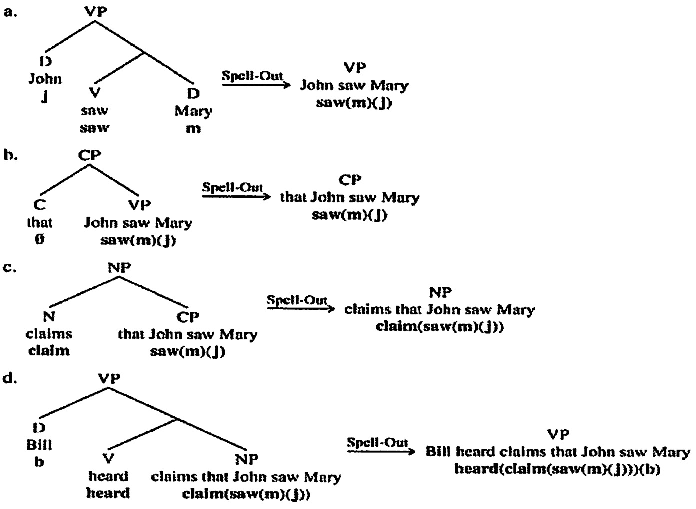
(6) a. *Which argument [that John$_i$ is a genius] did he$_i$ believe?

b. Which argument [that John$_i$ made] did he$_i$ believe?

Hunter and Franks の主張では名詞句から外置された要素も上位付加詞もどちらも遅発併合された「外置」ということになる。

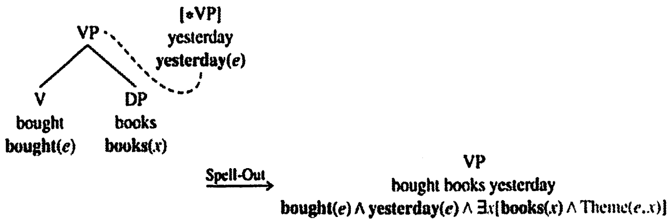
(7)を例にして Hunter and Franks では文がどのような派生を取るのかを確認しておこう。

(7) Bill heard claims that John saw Mary.[2]



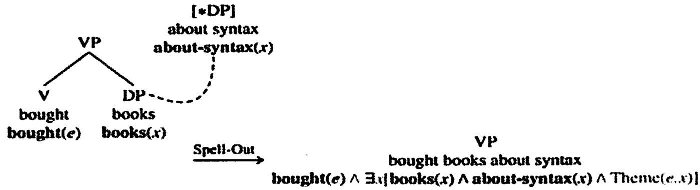
付加詞は、項とは異なり、狭義統語部門(narrow syntax)では派生上のワークスペース(workspace)に導入されるが、統語構造には併合されていないと仮定されている。

(8)　bought books yesterday [3]



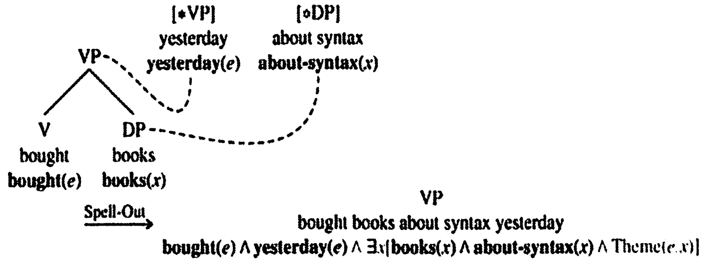
(9)では、*about syntax*が、遅発併合されるとVP構築時にワークスペース内に導入される。

(9)　bought books about syntax



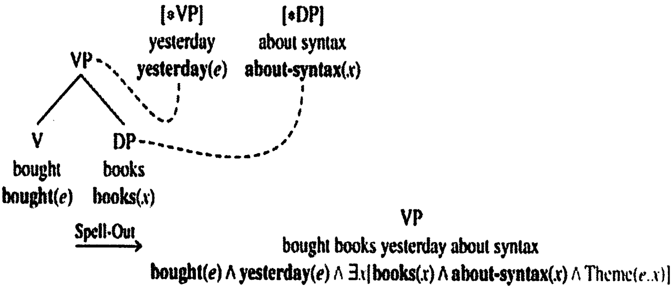
(10)は外置されていない場合であり、VP構築時に*yesterday, about syntax*がワークスペースに入る。[4]

(10)　bought books about syntax yesterday



外置が係わる派生(11)もVP構築時に*yesterday*, *about syntax*が(10)と同じようにワークスペースに導入されている。

(11) bought books yesterday about syntax



この分析では、外置の有無に変わらず、VP構築時に２つの付加詞がワークスペースに導入される点に注意されたい。さらに、スペルアウト後に(10)(11)の2つの文は、同じ派生過程をとり、同じ意味表示となる。しかし、音韻部門においては、付加詞のフレキシブルな線状化のため外置されている場合とそうでない場合が生じることになる。

次に、循環的解釈によって外置要素の構造上の位置が正しく予測されることを見る。(12)は、主語からの外置(SX)である。VP前置が適用されると、SXが随伴されるか否かで(12b, c)のように文法性の差が見られる。この違いからSXはTP内部にあると考えられる。

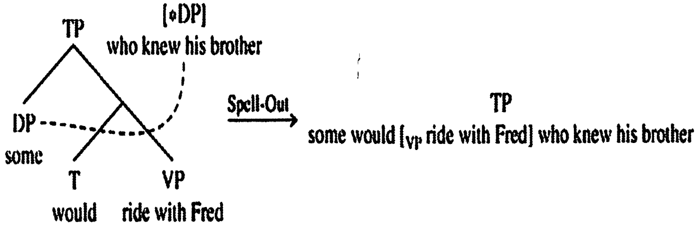
(12) a. [*Some*] would ride with Fred [$_{SX}$ who knew his brother].

b. [$_{VP}$ Ride with Fred], *some* would [$_{SX}$ who knew his brother].

c. *[$_{VP}$ Ride with Fred [$_{SX}$ who knew his brother]], *some* would.

この事実は、SXがTP構築の際にSXがワークスペースに導入されるということで説明が可能である。つまり、SXは、VP内部にないためにVPと随伴して前置することができないと説明される。

(13) [Some] would ride with Fred [$_{SX}$ who knew his brother].

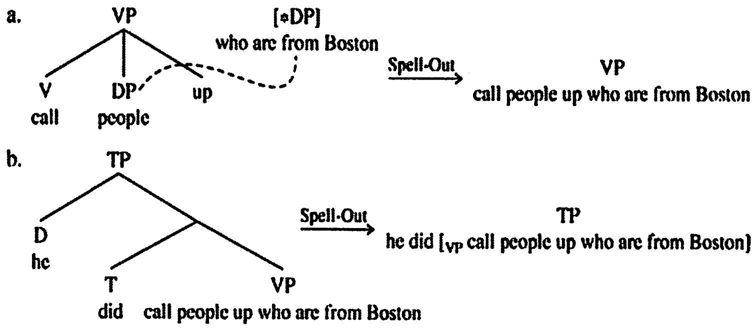


一方、目的語からの外置(OX)はVPと随伴が可能である。そのため、OXはVP内部にあると言える。

(14) a. John said that he would call [*people*] up [who are from Boston].
b. *...[$_{VP}$ call *people* up], he did [$_{OX}$ who are from Boston].
c. ...[$_{VP}$ call *people* up [$_{OX}$ who are from Boston]], he did.

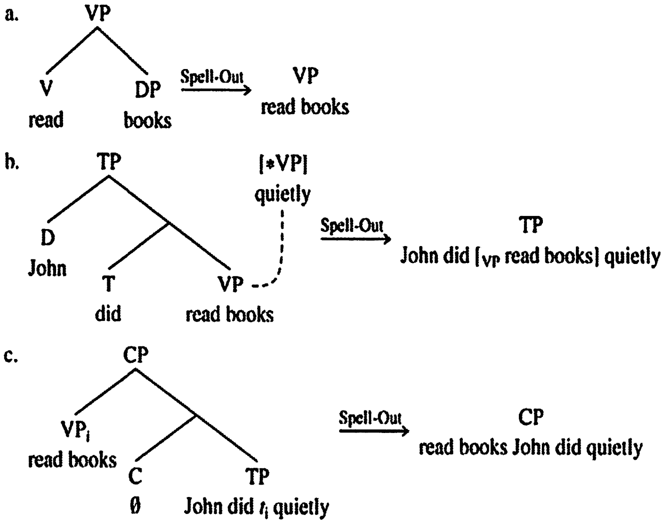
この対比は、OX が VP 構築時にワークスペースに導入されると考えることで説明できる。

(15) He did [$_{VP}$ call people up [$_{OX}$ who are from Boston]].



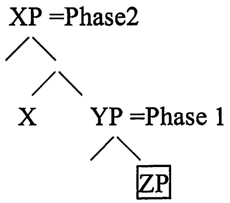
ちなみに、(16)にあるような上位付加詞の場合はTP構築時に *quietly* が遅発併合される。そのため上位付加詞は、それが修飾する VP が TP構築時にも見えるため VP と随伴されなくても構わない。

(16) [$_{\mathrm{VP}}$ Read books] (is what) John did [*quietly*].



2.2 Problems of Hunter and Franks (2014)

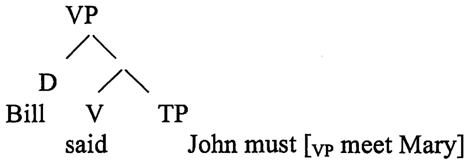
Hunter and Francks(2014)の問題点としてフェーズの捉え方に関するものが挙げられる。Uriagereka(1999)に倣い、フェーズはすべてのXPであるとし、XPが完成するとただちにスペルアウトされる。そのため、指定部や補部よりもさらに下位の要素、例えば、(17)ではZPが、XPが構築される時点で既に見えなくなり、統語操作が適用できなくなると予測する。しかしながら、この想定では、*wh*移動の長距離移動等が扱えなくなる。[5]

(17)


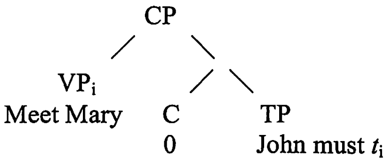
これに関連して、具体的にVP前置の派生を考えてみる。

(18) Meet Mary, Bill said that John must.

主節が完成した時点で埋込節のVPが既にスペルアウトされている。

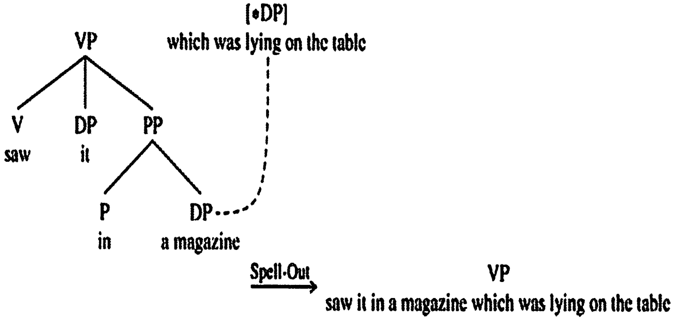
(19) Bill said that John must meet Mary


この時点でVPは主節のCからは見えず、VP前置はできないと誤って予測する。

(20) Meet Mary, Bill said that John must.


次に、PP内部からの外置が可能な例(21)もある。VP構築時に外置要素が遅発併合されても、PPは既にスペルアウトされており、その内部のDPとは結びつけることができなくなり、誤って非文と予測をする。

(21) I saw it [$_{PP}$ in [$_{DP}$ *a magazine*]] yesterday [which was lying on the table].



また、DP 内部にさらに埋め込まれた DP と外置要素と結びつけられている例(22)があり、この場合も Hunter and Frank のフェーズの想定では誤って非文法的であると予測する。

(22) [$_{DP}$ Only letters [$_{PP}$ from [*those people*]]] remained unanswered [that had received our earlier reply].

以上、Hunter and Franks(2014)の問題点を考察した。

3. An Alternative

本稿では、Hunter and Franks(2014)の分析の想定を一部修正し、Chomsky (2013, 2014)のラベルシステムにおいて特別な想定を設けずに名詞句からの外置に関する代案を提案する。

(23) ① 外置要素は、付加詞であり、遅発外的併合によって導入されたものである。

② 外置要素は、トランスファーされる前に既に統語構造に併合されている。

③ フェーズは、CP, v*Pとする。

④ 外置要素の認可は、フェーズ単位で行われる。

⑤ ラベル付けアルゴリズムは名詞句からの外置にも係わる。

以下、本稿の提案が名詞句からの外置に関する疑問点(2)をどのように解決するかを見ていく。

3.1 Derivation

派生の問題は、外置要素は付加詞であり、遅発併合で導入されるとするHunter and Franksに従う。

(6) a. *Which argument [that John$_i$ is a genius] did he$_i$ believe?

b. Which argument [that John$_i$ made] did he$_i$ believe?

外置された関係節は、分離先行詞が可能であり、この事実は、Culicover, Rochmont の一連の研究において移動ではなく、解釈規則によって説明されてきた。したがって、本稿においも外置要素は外的併合によって導入されているものとする。

(24) a. A man and a woman who were quite similar entered the room.

b. *A man* entered the room and *a woman* went out [who were quite similar].

Hunter and Franksの想定では、外置という現象は、付加詞が遅発併合された場合であり、派生のワークスペースに導入されるタイミングがずれたときの現象で、スペルアウト後の音韻部門での付加詞のフレキシブルな線上化によるものとしていた。本稿では、外置要素がインターフェースにトランスファーされる前の段階の狭義統語部門において統語構造に遅発併合されているとする。

外置の有無で文法性の差が見られるので、OXは間接目的語より高い位置にあると考えられる。

(25) a. I sent her_i many gifts last year [that $Mary_i$ didn't like]

b. *I sent her_i [many gift that $Mary_i$ didn't like] last year.

(26) a. [Nobody who knows anything about Rosa's_i weird sleeping habits] would ever call her_i before noon.

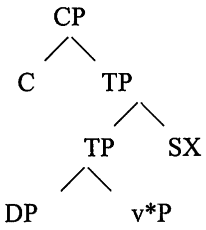
b. Nobody would ever call her before noon [who knows anything about Rosa's_i weird sleeping habits].

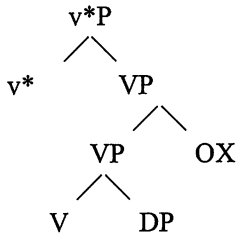
(25)(26)により、トランスファーされる前に外置要素は既に併合されていると考える。つまり、束縛関係が処理される意味的なインターフェースでは外置されている場合とそうでない場合とでは、関係詞節はそれぞれ異なる位置にあり、そのために束縛関係において文法性の差が見られると考える。

3.2 Locality

次に、局所性の問題は、フェーズの定義を変更することで解決されることを見る。名詞句からの外置の局所性については、提案④の外置要素の認可は、フェーズ単位で行われるということから導き出す。つまり、先行詞と外置要素は同じトランスファー領域になければならな

いということであるが、この提案は想定 (3) を基にしたものである。想定(3)は、フェーズが CP, v*Pである(提案③)と関係詞は先行詞をC統御することで適切に解釈されるとする。そうすると、関係詞がDP内にある場合であれ、外置された場合であれ、同じトランスファー領域(TP, VP)内にあればインターフェースで適切に解釈されることとなる。

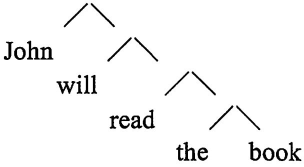
(27) a.


b.


3.3 EX and Labeling Algorithm

従来、構造構築は、Xバー理論に従い投射が完成すると仮定されていた。ミニマリスト・プログラムの枠組では裸句構造(bare phrase structure)が想定されている。併合によってできた統語的構築物は、フェーズ単位で循環的にインターフェースに送られる。その際に統語的構築物にはラベルが必要とされている。

(28) a. Merge(X, Y) → {X, Y}

b.


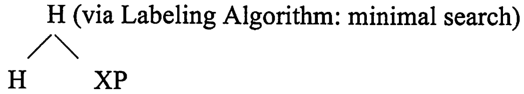
ラベルはラベル付けアルゴリズム(29)により付与される。

(29) Labeling is conducted via minimal search.

ラベル付けアルゴリズムとは、併合でできた統語的構築物が、最も近いヘッド(head)を探し出し、それをラベルとするというものである。HとXPが併合した場合は、HがXをC統御するので、HがXよりも近いヘッドとなり、Hがラベルになる。

(30) a. Merge (H, XP) → {H, XP}

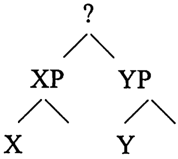
b.



一方、XPとYPが併合すると、XとYはお互いをC統御しないので、どちらがより近いとは言えない。このようにラベルがC統御で決まらない状況はXP-YP問題と呼ばれている。

(31) a. Merge (XP, YP) → {XP,YP}

b.

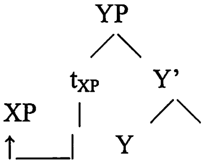


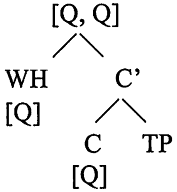
Chomskyは、XP-YP問題の回避法として、2つの方法を提案している。XPとYPのどちらかが移動すると、移動した要素のヘッドはラベル付けアルゴリズムには不可視的(invisible)となり、カウントされず、残った要素のヘッドがラベルになる。もう一方のケースは、XPとYPの間で共有されている素性で最も卓立した(prominent)な素性がラベルになるというものである。

(32) a. Labeling-through-movement: {XP, YP} can be labeled by raising either XP or YP so that there is only one visible head.

b. Labeling-through-feature-sharing: {XP, YP} can be labeled by sharing the most prominent features of XP and

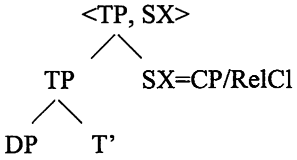
YP.

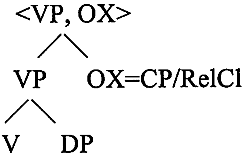
(33) a.


b.


付加構造も(31b)のような典型的なXP-YP構造である。付加構造は、Chomskyによると、対併合(Pair-Merge)によって構築される。本稿では、付加構造の場合においても最簡潔併合が関わり、付加詞と被修飾要素との関係はラベル付けアルゴリズムより最小探索(minimal search)によって最も近いヘッドを探し出し、適切な要素を見つけ出すことで対併合として認可されると提案する。[6]

(34) Labeling-through-Pair-Merge (Adjunction): {XP, YP} can be regarded as a special case of Merge <XP, YP> to form an ordered pair.

(35) a.


b.


では、この点について(36)(37)の例を考えてみよう。(36a)のように、移動した要素をターゲットにして外置要素の併合は可能であるが、移動のコピーをターゲットに関係節が併合された場合や中間位置のコピーをターゲットにした場合、遅発併合することはできない。

(36) a. What other issues do you consider *t* important [that have not been mentioned yet]?

b. *What other issues do you consider [*t* that have not been

mentioned yet] important?

(37) a. *One man seemed [*t* who knew the truth] to be late.

b. *Someone was given [*t* who likes Steinbeck] an interesting book.

これらの事実は、移動した要素のヘッドはラベル付けアルゴリズムには不可視的であるという想定から説明できる。つまり、付加詞の認可においてもラベル付けアルゴリズムが関わり、付加詞が最小探索によりそのホスト(被修飾要素)のヘッドを探し、局所的にC統御する直近の要素と適切な関係が成立すると認可される。一方、移動して残ったコピーのヘッドは、ラベル付けアルゴリズムには不可視的であるため付加詞と適切な関係ができず、構築された構造にラベルが付与されず、非文法的となる。

4. Concluding Remarks

名詞句からの外置は、外的併合により導入され、フェーズ単位で先行詞をC統御することにより適切に解釈を受け、認可される。これは、つまり、関係詞がDPから外置されている場合に限らず、外置されていない場合であれ、どちらの場合も同じトランスファー領域（TP、VP）内にあればインターフェースで適切に解釈される。このことは、(3)の最簡潔併合およびラベル付けアルゴリズムを想定することで自然な帰結として説明されるものであることを提案した。

References

Baltin, Mark. 1981. Strict bounding. In *The logical Problem of Language Acquisition*, ed. by C. L. Baker and John J. McCarthy, 257–295. Cambridge, MA: MIT Press.

Bošković, Željko. 2013. On the timing of labeling: deducing comp-trace effects, the Subject Condition, the Adjunct Condition, and tucking in from labeling. Ms. University of Connecticut.

Chomsky, Noam. 2008. On phases. In *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. By Robert Freidin, Carlos P. Otero, and Maria Luisa Zubizarreta, 133–166.Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam. 2013. Problems of projection. *Lingua* 130:33–49.

Chomsky, Noam. 2014. Problems of projection: extensions. Ms. MIT.

Citko, Barbara. 2014. *Phase Theory*. Cambridge University Press.

Culicover, Peter and Michael Rochemont. 1990. Extraposition and the complement principle. *Linguistic Inquiry* 21:23–47.

Culicover, Peter and Michael Rochemont. 1997. Deriving dependent right adjuncts in English. In *Rightward Movement*. ed. by Henk van Riemsdijk, David Leblanc, and Dorothee Beerman. Amsterdam: John Benjamins.

Epstein, Samuel David, Hisatsugu Kitahara, and T. Daniel Seely. 2012. Structure building that can't be! In *Ways of Structure Building*, ed. by Myriam Uribe-Etxebarria and Vidal Valmala, 253–270. Oxford: OUP.

Epstein, Samuel David, Hisatsugu Kitahara, and T. Daniel Seely. 2014. Labeling by minimal search: implications for successive-cyclic A-movement and the conception of the postulate "phase". *Linguistic Inquiry* 45:463–481.

Goto, Nobu. 2013. Labeling and scrambling in Japanese. In *Tohoku Essays and Studies in English Language and Literature*46:39-73, Tohoku Gakuin University.

Guéron, Jacqueline. 1980. On the syntax and semantics of PP extraposition. *Linguistic Inquiry* 11:637–678.

Guéron, Jacqueline, and Robert May. 1984. Extraposition and logical form. *Linguistic Inquiry* 15:1–31.

Hornstein, Nobert. 2009. *A Theory of Syntax*. Cambridge: CUP.

Hornstein, Norbert and Jairo Nunes. 2008. Adjunction, labeling, and bare phrase structure. *Biolinguistics* 2:57–86.

Huck, Geffrey J. and Younghee Na. 1990. Extraposition and focus. *Language* 66: 1-77.

Hunter, Tim. 2015. Deconstructing Merge and Move to make room for adjunction. *Syntax* 18: 266-319.

Hunter, Tim and Robert Franks. 2014. Eliminating rightward movement: extraposition as flexible linearization of adjuncts. *Linguistic Inquiry* 45:227–267.

Johnson, Kyle. 1985. A case for movement. Ph.D. Dissertation, MIT.

Lebeaux, David. 1988. Language acquisition and the form of the grammar. Ph.D. Dissertation, University of Massachusetts, Amherst.

Manninen, Satu. 2002. Extraposition and restrictive relative clauses. *Working Papers in Linguistics 2,* Lund University.

Mizuguchi, Manabu. 2009. Extraposition and cyclic syntax. *English Linguistics* 26: 293-328.

Oseki, Yohei. 2015. Elimination of Pair-Merge, *WCCFL* 32, 303-312.

Rizzi, Luigi. 2015. Cartography, criteria, and labeling, In *Beyond Functional Sequence: The Cartography of Syntactic Structures* ed. by Ur Shlonsky. 314-338. Oxford, OUP.

Rochemont, Michael and Peter Culicover. 1990. *English Focus Constructions and the Theory of Grammar.* Cambridge: CUP.

Sheehan, Michelle. 2011. Extraposition and antisymmetry. In *Linguistic Yearbook 2010* ed. by Jeroen van Craenenbroeck. 201-151. Amsterdam: John Benjamins.

Sheehan, Michelle. 2015. Some imprecations of a copy theory of labeling. *Syntax* 16: 362-396.

Sturnk, Jan. and Neal Snider 2013. Subclausal locality constraints on relative clause extraposition. In *Rightward Movement in a Comparative Perspective* ed. by Gert Webelhuth, Manfred Sailer, and Heike Walker. 99-143. Amsterdam: John Benjamins.

鈴木右文. 2006.「右方移動の有界性と焦点化とフェーズ」『言語科学の真髄を求めて—中島平三教授還暦記念論文集』鈴木右文、高見健一、水野佳三（編）, 285-295. 東京: ひつじ書房.

Uriagereka, Juan. 1999. Multiple spell-out. In *Working Minimalism* ed. by Samuel David Epstein and Norbert Hornstein, 251-282. Cambridge, MA: MIT Press.

Webelhuth, Gert, Manfred Sailer, and Heike Walker. 2013. Introduction by the editors. In *Rightward Movement in a Comparative Perspective* ed. by Gert

Webelhuth, Manfred Sailer, and Heike Walker, 99-143. Amsterdam: John Benjamins.

---

*本稿は、甲南英文学会第 31 回大会ワークショップ「周辺構造を巡って」(2015 年 7 月 11 日甲南大学)、日本英文学会九州支部第 68 回大会シンポジウム「最新文法理論の射程」(2015 年 10 月 24 日佐賀大学) において口頭発表を行った原稿に加筆、修正を行ったものである。会場において鈴木憲夫氏、登田龍彦氏、福田稔氏、西原俊明氏、牧木綿子氏、田中公介氏、黒木隆善氏より貴重な質問、コメントをいただいた。ここに記してお礼を申し上げたい。本稿の不備は著者自身のものである。本研究は JSPS 科研費 26370570 の助成を受けている。

[1] フェーズという概念を用いて右方移動の局所性を捉える試みは、Hunter and Franks(2014) 、 Mizuguchi (2009)、鈴木 (2006) 等、多数提案されているが、ここでは Hunter and Franks の研究を検討する。

[2] 最終節点の上段が音韻の表示でスペルアウト後の線状化を表している。最終節点の下段は、意味表示でスペルアウト後の意味合成を表している。

[3] (8)の樹形図では *yesterday* が VP 構築時にワークスペース内にあることを表し、*yesterday* の上の[*VP]は、VP を修飾することを表す素性で、破線は修飾関係を表している。

[4] 但し、DP 構築時に *about syntax* がワークスペースに入る派生も考えられるが、ここでは説明の都合上省略する。

[5] Hunter and Franks(2014) が依拠しているフェーズ理論の詳細は、Hunter(2015)で議論されている。ここでは Hunter(2015)には立ち入らない。Hunter(2015) を参照のこと。

[6] Hornstein(2009)および Hornstein and Nunes(2008)では、付加詞は併合されているが、ラベル付与が行われていないという提案、また、Goto(2013)では、従来のチョムスキー付加に倣い、下位の構造からラベルが継承されるとする提案がなされている。その他 Oseki(2015)では付加構造を作る 対併合という操作を破棄し、Epstein 他(2012)の構造構築の提案を基にして代案が提出されている。ここでは付加詞のラベルや派生についてどの提案が最も妥当であるかは論じない。詳細はそれぞれの研究を参照のこと。

On the Metaphorical Use of Tense Systems in English

Kazukuni Sado

Synopsis

In this study, we aim to discuss the disagreement between form and meaning in tenses in English. After providing an overview of tenses in a systemic functional perspective, we focus on the future present tense (a kind of tense whose form is in present but expresses the event in future) and observe that these events or situations are future known and related to the present moment. We accept that this is a case of grammatical metaphor although this does not apply to subordinate adverbial clauses. Moreover, we attempt to explain why the form of present tense in those clauses is interpreted as future.

0. Introduction

As we explore the issue of tense, we often realize that the system is more complicated than we first thought. What makes it complicated is not only its structure but its actual use in the context. We often determine that there is no one-to-one relationship between the form and the meaning, just as with other issues relating to English grammar, and tense is no exception. The focus of our interest in this study is why and how the "present" tense is used to express events other than the present moment or the time of utterance. It seems

necessary to review the basic concepts of tense, including the term "tense" itself before we further explore the issue.

1. The definition of tense system

1.1 Tense

When we refer to an event or situation, we naturally wish to locate it at some point in time, particularly with reference to the present moment. To use Bache's (2008:109) terms, we instruct "the Addressee to "look back" (past), to "look here" (present) or to "look ahead" (future) from a base time." Time adverbs such as yesterday, now, and tomorrow can fulfill this function; however, these are not regarded as tense in semantics. In this study, we adhere to Comrie's (1985:9) definition of "grammaticalised expression of location in time." Although Griffiths (2006:93) claims that tense is about inflectional pointers, we will see later that the concept of "grammaticalised expression" is not limited to inflections in the definition of the future tense. Most of us would accept that the grammar of English has three tenses: past, present, and future. We shall review the definitions of these three tenses in turn.

1.2 The present tense

In the first situation, we consider the case where we instruct the addressee to "look here." Using Comrie's (1985:36) terms, it is the location of a situation at the present moment. The following examples strictly fit this

definition:

(1) Adams steps forward, tries to drive, he's bowled!

(2) I add two cups of flour and fold it gently.

(3) I hereby declare you Mayor of Casterbridge.

(4) I now pronounce you man and wife.

(5) I promise that I shall be there.

Examples (1) and (2) are from Huddleston and Pullum (2002:128). Example (1) is an instance of a report, and the two verbs "steps" and "tries" are in simple present. It is natural to assume that the activity is going on in front of the reporter. Huddleston and Pullum give (2) as an example of demonstration. The speaker is simultaneously performing the actions described by verbs "add" and "fold" as he or she speaks. Examples (3), (4), and (5) are performatives. Example (3) is from Levinson (1983:232) and (4) is from Allot (2010:137), while (5) is Leech's (1983:176). In (3) and (4), the event takes place at the moment of the utterance and the Addressees become the mayor, or the marriage is fulfilled. The promise is made at the moment of uttering (5) although the action in the projected clause is performed in the future.

We must admit, however, as Comrie notes, that examples like the above are relatively rare in the actual usages. Comrie notes that the situations "occupy a much longer period of time than the present moment but

nonetheless include the present moment within them." See examples below.

(6) He drinks decaffeinated coffee nowadays.

(7) Robert loves pizza.

(8) Mary knows the way to San Jose.

Griffiths (2006:100-101) explains that in (6), "there are recurring instances of him drinking decaffeinated coffee." In Saeed's study (1997:107), examples (7) and (8) here, the present tense is used to express state. As Hofmann (1993:140) notes, they do "not have a natural point of termination" and according to Comrie, "continue as before unless changed."

We can observe that the situations described by the present tense in the above examples hold true at the moment of utterance, but unlike (1) and (2), (6) – (7) extend beyond it.[1] Comrie's definitions seem to cover them. As there seems to be no disagreement about how simple present tense is morpho-syntactically marked in the present day standard English, I do not dwell on that matter.

1.3 The past tense

Through the use of the form of past tense, the speaker instructs the addressee to "look back," to a "location in time prior to the present moment" (Comrie, 1985:41). How far removed it is from the present moment is not marked morpho-syntactically in English. The same form could be used for a

situation that took place the day before or a year ago.

1.4 The future tense

In Comrie's terms, future tense is "a situation at a time subsequent to the present moment," and there is no doubt that the speaker's instruction is to "look ahead," but we must treat the future tense with caution. If we were to draw a time line diagram, we would place the future in the opposite direction from the present, but this does not reflect reality. The future is hardly a mirror image of the past. The greatest difference between future and other tenses are that past and present are real, whereas the future is yet to be realized. The situation in the future has not happened at the time of utterance, and it is a matter of the speaker's prediction or intention and therefore closely tied to modality. Examples are provided from Swan (1995:209) below:

(9) I'll phone you tonight.
(10) Sandra is going to have another baby.

As we know, "will" in (9) is also a modal auxiliary verb of volition. "Going to" in (10) is a semi-modal used to express future. The English language does not mark the future tense by inflection, but its expression is periphrastic. Note that this is not the case in other languages such as French and Modern Hebrew. Nevertheless, this periphrastic usage does not invalidate the status of future tense in English. Periphrastic or not, the expression grammaticalises

the location in time.

Real-life examples of each tense are not necessarily as simple as the examples given above. An overview of the tense system is provided in the next section.

2. Tense systems in systemic functional grammar

We have observed so far that English has three tenses: past, present, and future and have reviewed each of their definitions, including that of tense itself. As we have already suggested above, the tense system of English is far from simple; in fact, Halliday and Mathiessen (2014:401-403) provide 36 combinations of tenses in finite clauses. Bache (2008:13-14) concisely summarizes the system below.

1.	past	took
2.	present	takes
3.	future	will take
4.	past in past	had taken
5.	past in present	has taken
6.	past in future	will have taken
7.	present in past	was taking
8.	present in present	is taking
9.	present in future	will be taking
10.	future in past	was going to take
11.	future in present	is going to take

12. future in future	will be going to take
13. past in future in past	was going to have taken
14. past in future in present	is going to have taken
15. past in future in future	will be going to have taken
16. present in past in past	had been taking
17. present in past in present	has been taking
18. present in past in future	will have been taking
19. present in future in past	was going to be taking
20. present in future in present	is going to be taking
21. present in future in future	will be going to be taking
22. future in past in past	had been going to take
23. future in past in present	has been going to take
24. future in past in future	will have been going to take
25. past in future in past in past	had been going to have taken
26. past in future in past in present	has been going to have taken
27. past in future in past in future	will have been going to have taken
28. present in past in future in past	was going to have been taking
29. present in past in future in present	is going to have been taking

30.	present in past in future in future	will be going to have been taking
31.	present in future in past in past	had been going to be taking
32.	present in future in past in present	has been going to be taking
33.	present in future in past in future	will have been going to be taking
34.	present in past in future in past in past	had been going to have been taking
35.	present in past in future in past in present	has been going to have been taking
36.	present in past in future in past in future	will have been going to have been taking

In the recursive system of the tense, Halliday and Mathiessen call the first one "the primary tense" and all the other tenses that follow it "the secondary tenses".[2] They explain that the primary tense fills the head position and is also deictic "relative to the speech event." To use Comrie's (1985:14) terms, the primary tense takes the speech situation or "here and now" as the deictic center. Saeed (1997:115) also notes that the reference point for these tenses is usually the act of speaking. We shall see exceptions to its deictic status later, but for the time being we can say that primary tenses are mostly deictic and finite. The secondary tenses are all non-deictic, and their reference points

are established by the primary tenses; they, in turn, establish the reference point for further secondary tenses in the recursive system.

It is interesting to note that secondary present is denoted by gerund-participles with the verbs ending with the suffix –ing, while secondary past is expressed using past participles, for example, "taken." Secondary future is expressed by "be going to."

Note that the combination of the finite tenses is restricted by the stop rule below. "α" means the primary tense and secondary tenses are labeled with Greek alphabets that follow "α."

(i) Apart from α, future occurs only once.

(ii) Apart from α, present occurs only once, and always at the deepest level.

(iii) Apart from α, the same tense does not occur twice consecutively.

Bache (2008:27) comments that this rule is reminiscent of the constraints in generative grammar in that they serve to avoid "generation of infinite number of ungrammatical and unacceptable strings." We must be careful, however, that these rules are not equivalent of those in generative grammar because combinations that do not follow this rule are not necessarily ungrammatical. Halliday and Mathiessen (2014:408) show that an example like "is being working" (present in present in present) violates rules (ii) and (iii), or "had had worked" (past in past in past) violates rule (iii) or even future in future in

future violates the rules (i) and (iii) but are not ungrammatical. Although they admit that they cannot test them experimentally, they maintain that "there is no clear boundary between what is in and what is out."

3. Inconsistencies between meaning and form

As we have suggested above, the grammatical forms and meanings do not have strict one-to-one correspondence, and this is true of the tense system of English. Let us consider the examples below in this chapter.

(11) I'm in this bank y'know? An' this mafia-type walks in and hauls out this sawed-off shotgun and yells that everybody should lie down.

(12) Johnathan is in the bedroom of the little flat in Luxor, with the moonlight sloping between the half-closed curtains. Sophie is lying on the bed in her white nightgown, eyes closed and face upward. Some of her drollness has returned. She has drunk a little vodka. So has he. The bottle stands between them.

(13) If I were still at school, I would work harder for my exams.

(14) He behaves as if he were the best player in the world.

(15) The plane lands at 8:30.

(16) I'll be disappointed if we have wet weather.

3.1 Historical present

Primary present tenses in each verbal group in (11) in Hofmann

(1993:125) and (12) in Saeed (1997:120) actually describe the situations in the past. These expressions, according to them, "add vividness to a recounting of a memorable experience" in (11) or "make the story more vivid and immediate" and are "a way of making a sequence of events as climatic" at the climax of the novel, The Night Manager, in (12). This usage known as "historical present" is a clear example of form/meaning inconsistency, presumably derived from the "vividness" the present tense lends to the utterances.

3.2 Subjunctive

In examples (13) in Leech (1989:451) and (14) in Declerck (1991:354), the situations in the present are expressed by past tenses. This usage of past tense is substantially different from the historical present. It can never be considered an extended feature of the past tense. Rather this marked tense seems to mark irrelais and is what many writers call subjunctive.[3]

3.3 Futurate

The use of present tense to describe the future is the focus of our interest in this study. Huddleston and Pullum (2002:134) call (15) from Kreidler (2014) and their (16) "Futurate." We adopt their term in our following discussion. Before engaging in the full discussion of these usages, we must explore the important concept in systemic functional grammar.

4. Grammatical metaphor

4.1 Basic concept

The notion of grammatical metaphor was introduced into systemic functional grammar by Halliday (1985). According to Martin and Rose (2007:109), "metaphor in general involves a transference of meaning in which a lexical item that normally means one thing comes to mean another." For instance, "flood" can be used metaphorically meaning "a moving mass of feeling or rhetoric" as opposed to the more literal "a moving mass of water". Thompson (2004:223) gives a provisional definition of it as "the expression of a meaning through a lexico-grammatical form that originally evolved to express a different kind of meaning." As Sado (2009:41) notes, nominalization is a typical example of grammatical metaphor. Bloor and Bloor (2004:199) describe it as "a process more congruently expressed as a verb is instead expressed as a noun." Their examples are *bath*, *thought*, *explanation*, and *destruction* that were derived from *bathe*, *think*, *explain*, and *destroy*. The former are processes realized as things.

4.2 Grammatical metaphor and metafunctions

In systemic functional grammar, a language has three metafunctions: ideational, interpersonal, and textual. These three metafunctions co-exist in all texts. Bloor and Bloor (2004) concisely explain the concept. An ideational meaning has to do with conceptual content, the representation of goings-on

in the world (experiential) or to do with the semantic relations between experiential elements (logical).[4] The interpersonal metafunction concerns the interactional aspect of language, the speaker–hearer dimension. Textual metafunction concerns the organization of text. We can regard the case of nominalization above as ideational metaphor. We consider the examples below from Araki and Yasui (1992:709) as examples of interpersonal metaphor.

(17) Can you pass the salt?

(18) Will you please wash the car?

These utterances, known as "indirect speech act" in pragmatics, have a morpho-syntactic interrogative form; however, their functions are command or request, which is typically expressed by imperatives. To argue the issues of grammatical metaphor and metafunctions would carry us too far away from the purpose of this paper. We shall explore the examples of futurate like (15) and (16) in terms of grammatical metaphor below.

5. Futurate and grammatical metaphor

5.1 Examples of futurate

It seems necessary for us to see more futurate examples to decide if all the cases can be treated in terms of grammatical metaphor.

(19) Flight 106 takes off at 11.45 pm.

(20) The plane leaves for Ankara at eight o'clock tonight.

(21) Mr. Tanaka retires in May.

(22) The next high tide is around 4 this afternoon.

(23) Next year White Sunday falls on 11 May.

(24) We'll leave as soon as it stops raining.

(25) "'If resistance spreads out of Asia and into Africa, much of the great progress in reducing deaths from malaria will be reversed,' said Jeremy Farrar, director of the Wellcome [sic] Trust global health charity."

Futurates can be found in the independent clauses in (19)—(23), whereas in (24) and (25), they appear in the dependent clauses. We discuss the two groups separately.

5.2. Futurate in independent clauses

What (19) – (23) have in common is, in Huddleston and Pullum's (2002:132) words, "something that can be assumed to be known already in the present." Examples (19) from Declerck (1991:92) and (20) from Quirk et al (1985:182) have a schedule. In (21) from Kreidler (2014:111), retirement has already been determined by the compulsory retirement age of the company. Example (22) from Huddleston and Pullum (2002:132) refer, in their words, to "cyclic events in nature." The event in (23) is based on calendar and is already a fact. Note that this use of present tense is

ungrammatical when the event or situation cannot be known or a fact at the present moment, as in the following examples:

(26) *It vanishes soon.

(27) *It snows tomorrow.

(28) *John falls down the stairs next week.

According to Kreider (2014:111), his example (26) above is unlikely, if not impossible, and the same goes for Declerk's (1991:92) examples (27) and (28).

It is plausible to regard the examples we have discussed in this subsection as a case of grammatical metaphor because the transference of meaning occurs to express a different kind of meaning; that is, the form originally employed to express the present situation is a means of expressing a future time. However, it remains to be seen if the same explanation can be given to examples (24) and (25).

5.3. Futurate in dependent clause

In example (24) from Huddleston and Pullum (2002:135) and (25) from article of The Japan Times, August 1, 2014[5], the situation in the main, independent clauses is described in the future tense; however, the present tense in the dependent clause expresses the future. These processes, however, do not describe situations that are known in the present moment. We are never

sure if it will stop raining nor whether the resistance will spread out of Asia and into Africa. It is impossible to explain the use of the present tense in the dependent clauses in (24) and (25), in the same way as futurates in the independent clauses. An examination of more examples in dependent clauses will assist the argument.

(29) If she smiles, it will be at your hairline.

(30) We'll support them till they find work.

(31) Stay with me until I go.

(32) Stocks of food cannot be brought in before the rains start.

Example (29) from Biber et al (1999:779) and (30) from Sinclair (1990:347) are the same type of examples we have seen above. Sinclair's other examples (31) and (32) are somewhat different. Example (31) is an instruction and (32) expresses modality. The content of the order is definitely carried out in the future, and the modality is also about the future.

5.4 The effect of clausal relationship

We may be able to give a possible explanation in terms of the status of these clauses, as all of these are dependent. The following examples have dependent relationships between the clauses, or parataxis.

(33) Dr Dique grew up in colonial India, developing a love of classical

literature, history, painting and music.

(34) Driving home after work, I accidentally went through a red light.

(35) THE [sic] Government's Defence Research Agency is cutting at least 1,950 jobs by closing more than a third of its 54 sites.

(36) With the Upper House election approaching in July, Abe this time around seems to be focusing on economic issues first by appointing most of his close aides and party heavyweights to the economic and financial posts.

(37) Andy Murray stood with the Union Jack draped over [sic add *his*] shoulders, an Olympic gold medal around his neck, next to the man he had just beaten, Roger Federer, and basking in the roar of the Centre Court crowd.

Collins and Shogakukan provide many useful examples online. Examples (33), (34), and (35) are from Collins Wordbank Online, whereas (36) and (37) are from articles in The Japan Times dated December 27 and August 7, 2012, respectively. In all these examples, the situations in the dependent clauses are simultaneous with those in the independent clauses. The tense of the independent clauses is, in a way, controlled by the main clauses. As the primary tense is the head and deictic, it locates the time in relation to the time of utterance. The time is located in the past in (33), (34), and (37), while time is located in the present in (35) and (36). These tenses located in the independent clause are reference points for the tenses in the dependent clauses. We therefore are inclined to expect the same effect for the futurate in the dependent clauses above. Does the future tense in main clauses set up

the reference points for the verbal groups in the dependent clauses? Unfortunately, this explanation can hardly be a solution to our problem. We must focus our attention on the crucial difference among examples (24), (25), (29), and (30) and (33)–(37). The difference between them lies in the status of the dependent clauses. The first four are all finite, while the latter five are all non-finite. Finiteness is a crucial difference which we should not overlook in this case. What applies to non-finite clauses cannot simply be applied to the finite ones.

We still need to consider, from another perspective, what causes the present tense to mean future. As we have seen above, all primary tenses of the lexical verbs are finite without exception. Although finiteness is obligatory in the primary tense of this kind of verbs, we need to determine if all of them are deictic. There is no doubt that all deictic tenses are finite; however, is the reverse always true? Let us consider the examples from Biber et al (1999:455) below.

(38) A girl at work said she worked at Woolworths.
(39) Abbey said there was a meeting planned to discuss the contract this week.

In the second clause in the examples, as Thompson (2004:210) explains, the meaning of the original language rather than the actual wording of the sayer is reported in the dependent clauses. This does not happen if the clause quotes the original verbal event or the locution, in systemic functional terms.

Compare this with his example below.

(40) Meurig said readily: "He comes with me."

The striking difference between (38), (39), and (40) is that the first two have dependency between the clauses or are hypostatic, whereas the last one has a paratactic or co-ordinate relationship. In (38), as the girl may still be working, the present tense seems to be more appropriate, and even future tense is possible in the case of (39). This phenomenon does not happen in the case of the paratactic example in (40). To use Huddleston and Pullum's (2002:1025) term, the tenses are "backshifted."

Our interest is in what this backshift means in terms of tense. It is clear that past tense in examples (38) and (39) are non-deictic. Their reference point is not the present moment but the primary tense of the main clause. We have already seen above that all non-finite dependent clauses are non-deictic, but we surmised that not all finite clauses are deictic. Although these finite non-deictic tenses are not common and may be exceptional, it explains why the present tenses in some cases of dependent clauses are reinterpreted as future. Unlike non-finite clauses, their tense is not directly controlled by the primary tense in the independent, main clauses because dependent clauses have their own finite primary tense. It is more reasonable to posit that the form of present tense is non-deictic and that its reference point is inferred from the wider context. This inferred tense establishes the reference point for

the primary tense in the dependent clauses. To use Huddleston and Pullum's (2002:140) words, "the temporal identification of T_0 is given by the context." These cases are strikingly different from the futurate in independent clauses, where the tense can, in a sense, be considered to be an extension of the meaning of the present tense to express the known future. It is therefore evident that the futurate in dependent clauses is not a case of grammatical metaphor.

6. Conclusion

We have analyzed English tenses from the systemic functional perspective especially in terms of grammatical metaphor. It is, in my view, a very interesting concept in Halliday's analysis. We have seen that present tense may describe the past (historical present), past tense may describe the present or even future (subjunctive), and present tense may describe the future (futurate). Thorough discussion of these three phenomena is outside the scope of this paper. We have chosen to focus on the futurate in the present study and found that we needed to make a subdivision in futurate. Those in the independent clauses had "known future" in common. This led us to treat them as an instance of grammatical metaphor, particularly the ideational metaphor. As the same explanation did not work for those in dependent clauses, we could not treat them as a case of grammatical metaphor. We however must acknowledge that we have yet to prove that all instances of the historical present and subjunctives are grammatical metaphor. Even for

futurate, we have not discussed the use of present in present that describes future. The treatment of tense in terms of grammatical metaphor, as far as we are concerned, has just begun. Hence, studies with more examples will be needed in this subfield.

Notes

[1] In performatives like (3) and (4), the utterance and the situation is exactly simultaneous only in the sense that the world is changed at the moment of speaking, but we must not overlook the fact that the states pronounced in the utterances is maintained into the future unless they are altered.

[2] We must be careful that the third one in the verbal group is not called the tertiary tense. All the tenses that follow the primary are called secondary as opposed to the primary in systemic functional grammar.

[3] We ought to be mindful that this is not the only term for the usage. Huddleston and Pullum (2002:148) call it "modal remoteness."

[4] Here the ideational metafunctions are subdivided into two further metafunctions.

[5] This article is reprinted in The Japan Times News Digest vol.51; (36) is in Vol.41 and (37) is in Vol.39.

References

Allot, N(2010) *Key Terms In Pragmatics* Continuum.

Araki. K and Yasui,M(1992) *Gendai Eibunpou Jiten* [Sanseido's New Dictionary of English Grammar] Sanseido.

Bache, C.(2008) *English Tense and Aspect in Halliday's Systemic Functional Grammar: A Critical Appraisal and an Alternative* Equinox.

Biber,D., S.Johanson, G.Leech , and E.Finegan (1999) *Longman Grammar of Spoken*

and Written English, Longman.

Bloor, T. and M.Bloor (2004) *The Functional Analysis of English*, second edition, Arnold.

Comrie, B.(1985) *Tense* Cambridge University Press.

Declerck, R. (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Kaitakusha.

Griffiths, G.(2006) *An Introduction to English Semantics and Pragmatics* Edinburgh University Press.

Halliday, M.A.K. (1985) *An Introduction to Functional Grammar* Arnold

Halliday, M.A.K and C.M.I.M.Matthiessen (2004) *An Introduction to Functional Grammar*, third edition, Arnold.

Halliday, M.A.K and C.M.I.M.Matthiessen (2014) *Halliday's Introduction to Functional Grammar*, fourth edition, Routledge.

Huddleston, H and G.K.Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press.

Hofmann,Th.R.(1993) *Realms of Meaning: An Introduction to Semantics* Longman

Kreidler, C.W.(2014) *Introduction to English Semantics* second edition Routledge.

Leech,G (1983) *Principles of Pragmatics* Longman

Leech,G.(1989) *An A—Z of English Grammar & Usage* Nelson

Levinson,S.C.(1983) *Pragmatics* Cambridge University Press.

Martin,J.R and Rose,D. (2007) *Working with Discourse* second edition Continuum

Quirk,R., S.Greebaum, G.Leech, and J.Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of English*, Longman.

Sado,K.(2008) On the role of 'Gerunds' in clause combinations The Council of College English Teachers Research Reports No27

Sado,K.(2009) "Grammatical Metaphor as a Relative Scale of Nominalization", *Konan Eibungaku* No.24

Sado,K.(2011) "Finiteness and the Thematic Structure", *Konan Eibungaku* No.26

Saeed,J.I.(1997) *Semantics* Blackwell.

Sinclair,J.(1990) *Collins Cobuild English Grammar* HarperCollins.

Swan,M.(1995) *Practical English Usage* new edition Oxford University Press.

Thompson, G.(2004) *Introducing Functional Grammar*, second edition, Arnold.

甲南英文学会規約

第１条　名称　本会は、甲南英文学会と称し、事務局は、甲南大学文学部英語英米文学科に置く。

第２条　目的　本会は、会員のイギリス文学・アメリカ文学・英語学の研究を促進し、会員間の親睦を図ることをその目的とする。

第３条　事業　本会は、その目的を達成するために次の事業を行う。

1. 研究発表会および講演会
2. 機関誌『甲南英文学』の発行
3. 役員会が必要としたその他の事業

第４条　組織　本会は、つぎの会員を以て組織する。

1. 一般会員
   - イ．甲南大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）の修士課程の在籍者、学位取得者、および博士課程・博士後期課程の在籍者、学位取得者または単位修得者
   - ロ．甲南大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）および甲南大学文学部英語英米文学科の専任教員
   - ハ．上記イ、ロ以外の者で、本会の会員の推薦により、役員会の承認を受けた者
2. 名誉会員　本会の発展に著しく貢献した者
3. 賛助会員

第５条　役員　本会に次の役員を置く。会長１名、副会長１名、評議員若干名、会計２名、会計監査２名、大会準備委員長１名、編集委員長１名、幹事２名。

2. 役員の任期は、それぞれ２年とし、重任は妨げない。
3. 会長、副会長は、役員会の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
4. 評議員は、第４条第１項イ、ロによって定められた会員の互選によってこれを選出する。
5. 会計、会計監査、大会準備委員長、編集委員長、幹事は、会長の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
6. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
7. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故ある場合、会長の職務を代行する。
8. 評議員は、会員の意思を代表する。

9. 会計は、本会の財務を執行する。
10. 会計監査は、財務執行状況を監査する。
11. 大会準備委員長は、大会準備委員会を代表する。
12. 編集委員長は、編集委員会を代表する。
13. 幹事は、本会の会務を執行する。

第6条 会計　会計年度は4月1日から翌年3月31日までとする。なお、会計報告は、総会の承認を得るものとする。

2. 会費は、一般会員については年間3,000円、学生会員については1,000円とする。

第7条 総会　総会は、少なくとも年1回これを開催し、本会の重要事項を協議、決定する。

2. 総会は、一般会員の過半数を以て成立し、その決議には出席者の過半数の賛成を要する。
3. 規約の改定は、総会出席者の2/3以上の賛成に基づき、承認される。

第8条 役員会　第5条第1項に定められた役員で構成し、本会の運営を円滑にするために協議する。

第9条 大会準備委員会　第3条第1項に定められた事業を企画し実施する。

2. 大会準備委員は、大会準備委員長の推薦を経て会長がこれを委嘱する。定員は3名とする。

第10条 編集委員会　第3条第2項に定められた事業を企画し実施する。

2. 編集委員は、編集委員長の推薦を経て会長がこれを委嘱する。定員は、イギリス文学・アメリカ文学・英語学から若干名とする。編集委員長は、特別に専門委員を委嘱することができる。

第11条 顧問　本会に顧問を置くことができる。

本規約は、昭和58年12月9日より実施する。
この規約は、昭和62年5月31日に改訂。
この規約は、平成7年7月1日に改訂。
この規約は、平成11年6月26日に改訂。
この規約は、平成13年6月23日に改訂。
この規約は、平成17年7月3日に改訂。
この規約は、平成21年6月27日に改訂。
この規約は、平成22年7月3日に改訂。
この規約は、平成23年4月1日に改訂。

『甲南英文学』投稿規定

1. 投稿論文は未発表のものに限る。ただし、口頭で発表したものは、その旨明記してあればこの限りでない。
2. 論文は 1 部プリントアウトして郵送するとともに、Word ファイル形式（.doc）、あるいはリッチテキスト形式（.rtf）の電子データを任意の方法で編集委員長宛に提出する。和文、英文いずれの論文にも英文のシノプシスを添付する。ただし、シノプシスは 65 ストローク×15 行（ダブルスペース）以内とする。
3. 長さは次の通りとする。
   イ. 和文：ワードプロセッサー（40 字×20 行）で A4 判 15 枚程度
   ロ. 英文：ワードプロセッサー（65 ストローク×25 行、ダブルスペース）で A4 判 20 枚程度
4. 書式上の注意
   イ. 注は原稿の末尾に付ける。
   ロ. 引用文には、原則として、訳文はつけない。
   ハ. 人名、地名、書名等は、少なくとも初出の個所で原語名を書くことを原則とする。
   ニ. その他については、イギリス文学、アメリカ文学の場合、*MLA Handbook*, 7th ed. (New York: MLA, 2009)（『MLA 英語論文の手引き』第 6 版，北星堂，2005 年）に、英語学の場合 Linguistic Inquiry style sheet (*Linguistic Inquiry* vol. 24) に従うものとする。
5. 校正は、初校に限り、執筆者が行うこととするが、この際の訂正加筆は必ず植字上の誤りに関するもののみとし、内容に関する訂正は認めない。
6. 締切は 11 月 30 日とする。

甲南英文学会研究発表規定

1. 発表者は、甲南英文学会の会員であること。
2. 発表希望者は、発表要旨を1200字（英文の場合は500語）程度にまとめて、プリントアウトしたもの1部を電子データとともに大会準備委員長宛に提出すること。
3. 詮衡および研究発表の割り振りは、大会準備委員会が行い、詮衡結果は、ただちに応募者に通知する。
4. 発表時間は、原則として一人30分以内（質疑応答は10分）とする。

ISSN 1883-9924

甲　南　英　文　学　　*No. 31*

平成28年6月30日　印刷
平成28年9月17日　発行

—非　売　品—

編集兼発行者　甲　南　英　文　学　会
〒658-8501 神戸市東灘区岡本8-9-1
甲南大学文学部英語英米文学科気付